

沈約「南齊禪林寺尼淨秀行狀」譯注

「中國在家の教理と經典」 研究班

本稿は共同研究班「中國在家の教理と經典」(二〇一六年四月—二〇二〇年三月)の成果報告の一部である。研究班では唐の道宣『廣弘明集』から要となる文獻を選び、原文校勘と譯注を作成した。本稿は四年間の會讀のうち最後に取り上げた沈約「南齊禪林寺尼淨秀行狀」の原文校勘と譯注である。

人文科學研究所には六朝隋唐の皇族貴族の佛教信仰を主題とする會讀班の傳統がある。それらは特に梁の僧祐『弘明集』十四卷と唐の道宣『廣弘明集』三十卷に収める著作を取り上げた。本班もこの流れから『廣弘明集』の會讀に意を傾けた。

これまでの研究班が公刊した譯注と比べて、本稿は一つ新たな進展がある。これまでは大正新脩大藏經を用い、その本文と校勘の對象とされた高麗藏再雕本と、しばしば宋元明三本と通稱される南宋の思溪大藏經・元の普寧寺版・明の嘉興藏とを用いた。そしてそれらについては、高麗藏再雕本の影印本を参照し得た以外、版木の畫像を見ることが叶わなかったため、大正新脩大藏經の校勘をそのま

ま信じて受け入れることに甘んじなければならなかった。また大正新脩大藏經の校勘記において宮本と稱された「宮内省圖書寮藏の舊宋本」については、宮内廳書陵部(かつての宮内省圖書寮)に複寫請求し、寫眞焼付料を負担すれば紙焼白黒畫像を入手することはできた。しかしそれも時間と金錢を要することであった。しかし、ここ十年ほどの間に、大藏經畫像資料をめぐるこのような状況は一新し、今や白黒寫眞畫像ならば高麗藏初雕本(その公開は二〇一一年頃。大正藏未收)・高麗藏再雕本・金藏廣勝寺本(大正藏未收)・宮内省圖書陵藏舊宋本(福州東禪寺の崇寧大藏經と福州開元寺の毘盧大藏經の混合藏)・嘉興藏の畫像を圖書またはオンライン電子版畫像として入手可能になった。思溪大藏經については、まだごく一部に過ぎないが、中國國家圖書館より影印本が公刊されつつあり、幸い『弘明集』『廣弘明集』は既に出版されている。

こうした基本資料公開の結果、我々は『廣弘明集』研究をする際に、大正新脩大藏經の校勘をやみくもに信ずるしか術がなかった時

代に別れを告げ、大正新脩大藏經の文字が正しいか誤植を含むかを自ら檢證できるようにした。これは特筆すべき進展である。本稿に掲げる原文校勘もまた、この新たな恩恵にあずかり、大正藏を批判的に活用することができると感じる。以下に示すように、本稿で扱う沈約「南齊禪林寺尼淨秀行狀」原文に大正新脩大藏經の誤りがある場合には、当該文字に「★」を付して大正新脩大藏經に誤植があることを明らかにした。このような作業は前世紀の間はしたくともできないことであつた。

大正新脩大藏經における校勘の精度は卷ごとに異なる。日本の各宗派の根本として扱われる佛典の場合は校勘が入念になされていると言つてよいが、一方、どの宗派とも直接的に關わらない佛典の場合には時として粗密が甚だしい。既に指摘されている例として『廣弘明集』卷二十七の場合、大正新脩大藏經の校勘には無視できぬ問題がある。すなわち「宮本」（毘盧藏Ⅱ福州開元寺版）の校勘だけでも平均して卷二十七に關して、大正新脩大藏經一頁あたり、約五箇所の割合で校勘の誤りがあることが分かっている（船山二〇〇六・三一四～三一七頁「版本問題餘録」参照）。

本稿で取り上げる大正新脩大藏經『廣弘明集』卷二十三「南齊禪林寺尼淨秀行狀」の誤植も夥しい。「宮本」のみならず全ての誤植を数えるならば、大正新脩大藏經二頁（六段）に三十七箇所の文字の誤りがある。これは大正藏一頁中に二十箇所弱の誤りがあることを示す。大正新脩大藏經が出版開始されてから約百年が経とうとしている今に至つて、やっと始めてこのような文獻學の基礎作業が可能となったのだ。

以下に『廣弘明集』卷二十三に収める沈約「南齊禪林寺尼淨秀行狀」の原文・原文校勘・現代日本語譯・語注を掲げる。（船山徹）

【原文と校勘】『廣弘明集』卷二三僧行篇

「南齊禪林寺尼淨秀行狀」 沈約

比丘尼釋淨秀，本姓梁氏，安定烏氏人也。

其先出自少昊，至伯益佐禹治水，賜姓嬴氏。周孝王時，封其十世孫非子於秦。其曾孫秦仲爲宣王侯伯。平王東遷，封秦仲少子於梁，是爲梁伯。漢景帝世，梁林爲太原太守，徙居北地烏氏，遂爲郡人焉。自時厥後，昌阜于世，名德交暉，蟬冕疊映。漢元嘉元年，梁景爲尚書令，少習『韓詩』，爲世通儒。魏時梁爽，爲司徒左長史，祕書監，博極群書，善談玄理。晉太始中，梁闡爲涼、雍二州刺史，卽尼之迺祖也。闡孫搗，晉范陽王虓驃騎參軍事、魚陽太守。遭永嘉蕩析，淪於僞趙，爲祕書監，征南長史。後得還晉，爲散騎侍郎。子疇，字道度，征虜司馬。子榮之仕宋，征虜府參軍事，封龍川縣都亭侯。

尼卽都亭侯之第四女也。挺慧悟於曠劫，體妙解於當年，而性調和綽，不與凡孩孺同數。弱齡便神情峻徹，非常童稚之伍，行仁尙道，洗志法門。

至年十歲，慈念彌篤，絕粉黛之容，棄錦綺之翫，誦經行道，長齋蔬食。

年十二，便求出家，家人苦相禁抑，皆莫之許。於是心祈冥感，專精一念，乃屢獲瑞祥，亟降瑞相。第四叔超，獨爲先覺，開譬内外，故雅操獲遂。

上天性聰叡，幼而超群。年至七歲，自然持齋。家中請僧行道，聞讀『大涅槃經』，不聽食肉。於是卽長蔬不噉，二親覺知，若得魚肉，輒便棄去。

昔有外國普練道人，出於京師，往來梁舍，便就五戒，勤翹奉持，

未嘗違犯。日夜恒以禮拜誦誦爲業，更無餘務。及手能書，常自寫經。所有財物，唯充功德之用，不營俗好。

少欲入道，父母爲障，遂推流歲月。至年二十九，方獲所志，落髮青園，服膺寺主。上事師虔孝，先意承旨，盡身竭力，猶懼弗及。躬修三業，夙夜匪懈。僧使衆役，每居其首，精進劬勤，觸事關涉。有開士馬先生者，於青園見上，即便記云：「此尼當生兜率天也」。

又親於佛殿內坐禪，同集三人，忽聞空中有聲狀如牛吼。二尼驚怖，迷悶戰慄，上淡然自若，徐起下牀，歸房執燭，檢聲所在。旋至拘欄，二尼便聞殿上有人相語云：「各自避路。某甲師還」。後又於禪房中坐。伴類數人，一尼鼾眠。此尼於睡中見有一人頭屈于屋，語云：「勿驚某甲師也」。此尼於是不敢復坐。又以一時坐禪，同伴一尼有小緣事，暫欲下牀，見有一人抵掌止之曰：「莫撓某甲師」。於是閉氣徐出，歎未曾有。如此之事比類甚繁，既不即記，悉多漏忘，不得具載。性受戒律，進止俯仰，必欲遵承。於是現請曜律師講，內自思惟，但有直一千。心中憂慮事不辦。夜即夢見鴉、鵲、鸚鵡、雀子各乘車，車竝安軒，車之大小還稱可鳥形，同聲唱言：「我助某甲尼講去」。既寤歡喜，知事當成。及至就講，乃得七十檀越設供，果食皆精。

後又請穎律師開律。即發講日，清淨盥水自然香如水園香氣，深以爲欣。既而坐禪得定，至於中夜方起，更無餘伴。便自念言：「將不犯獨」。即諮律師。律師答云：「無所犯也」，意中猶豫恐違失。

且見諸寺尼僧，多不如法，乃喟然歎曰：「嗚呼，鴻微未遠，靈緒稍隳。自非引咎責躬，豈能導物」。即自懺悔，行摩那埵。於是京師二部莫不咨嗟云：「如斯之人，律行明白，規矩應法，尙爾思愆，何況我等動靜多過而不慚愧者哉」。遂相率普懺，無有孑遺。

又於南園就穎律師受戒。即受戒日，淨盥水香還復如前。青園諸尼及以餘寺，無不更受戒者。律師於是亦次第詣寺，敷弘戒品，闡揚

大教。故憲軌遐流，迄屆于今。穎律師又令上約語諸寺尼，有高牀俗服者，一切改易。上奉旨制勒，無不祇承。律藏之興，自茲更始。後又就三藏法師受戒，清淨水香復如前不異。

青園徒衆既廣，所見不同。師已遷背，更無觀侍。於是思別立住處，可得外嚴聖則，內窮宴默者。

以宋大明七年八月，故黃修儀及南昌公主深崇三寶，敬仰德行，初置精舍。

上麻衣弗溫，糞食忘飢，躬執泥瓦，盡勤夙夜。

以宋泰始三年，明帝賜號曰禪林。蓋性好閑靜，冥感有徵矣。而制龕造像，無不必備。又寫集衆經，皆令具足，裝潢染成，悉自然有。娑伽羅龍王兄弟二人現迹，彌日不滅。知識往來，竝親瞻觀。招納同住十有餘人，訓化獎率，皆令禪誦。每至奉請聖僧，果食之上，必有異迹。

又於一時，虔請聖衆七日供養。禮懺始訖，攝心運想，即見兩外國道人，舉手共語，一云呿羅，一言毘呿羅，所著袈裟色如桑葚之熟。因即取泥，以壞衣色，如所見。於是遠近尼僧，竝相倣效，改服間色。故得絕於五大之過，道俗有分者也。

此後又請阿耨達池五百羅漢，日日凡聖無遮大會。已近二旬，供設既豐，復更請闍賓國五百羅漢，足上爲千。及請凡僧，還如前法。始過一日，見有一外國道人，衆僧悉皆不識。於是試相借問，自云：「從闍賓國來」。又問：「來此幾時」。答云：「來此一年也」。衆僧覺異，令人守門觀其動靜。而食畢，乃於宋林門出，使人逐視，見從宋林門去，行十餘步，奄便失之。

又嘗請聖僧浴，器盛香湯及以雜物。因而禮拜，內外寂默。即聞器檣杓作聲，如用水法。意謂或是有人出。便共往看，但見水杓，自然搖動。故知神異。

又曾夜中，忽見滿屋光明，正言「已曉」，自起開戶，見外猶闇，即便閉戶還牀^(五五)，復寢久，方乃明也。

又經違和極篤^(五七)。忽自見大光明，遍於世界，山河樹木，浩然無礙。欣爾獨笑，傍人怪問。具陳所見，即能起行，禮拜讀誦，如常無異。

又於一時復違和，亦甚危困。忽舉兩手，狀如捧物，語傍人，不解，問言，「爲何所捧」。答云，「見寶塔從地出，意欲接之」。^(五八)幡花伎樂，無非所有。於是疾恙，豁然而除，都無復患。

又復違和，數日中亦殊綿悞，恒多東向視，合掌向空。於一時中急索香火，移時合掌。即自說云，「見彌勒佛及與舍利弗、目連等諸聖人」。亦自見諸弟子數甚無量滿虛空中，須臾見彌勒下生翅頭末城，云，「有人持幡華伎樂及三臺來迎於此。上幡華伎樂，非世間比。半天而住，一臺已在半路，一臺未至半路，一臺未見，但聞有而已。爾時已作兩臺。爲此兆故，即更作一臺也」。又云，「有兩樹寶華在邊，人來近牀，語『莫壞我華』」。自此之後，病即除損。

前後遇疾，恒有瑞相。或得涼風，或得妙藥，或聞異香，病便即愈。疾差之爲，理都以漸，豁然而去。如此甚數，不能備記。

又天監三年，一夏違和。於晝日眠中見虛空藏菩薩。即自圍遶誦唄，唄聲徹外。眠覺所患即除。又白日臥，開眼見佛入房，幡蓋滿屋。語傍人令燒香，了自不見。

上以天監五年六月十七日得病，苦心悶，不下飲。彭城寺令法師以六月十九日夜，得夢見一處，謂是兜率天上。住止嚴麗，非世間比。言「此是上住處」，即見上在中。於是法師有語上，「上得生好處，當見將接。上是法師，小品檀越，勿見遺棄」。上即答云，「法師丈夫，又弘通經教，自應居勝地。某甲是女人，何能益」。法師又云，「不如此也。雖爲丈夫，不能精進，持戒不及」。

上時體已轉惡，與令法師素疎，不堪相見。病既稍增，飲粥日少，

爲治無益，漸就綿悞。

至七月十二日，爾時天雨涼^(六四)，悶勢如小退。自云，「夢見迎來至佛殿西頭，人人捉幡竿，猶車在地。幡之爲理，不異世間軍隊擔鼓、旗幡也」。

至二十日便絕，不復進飲粥。

至二十二日，令請相識衆僧設會，意似分別。

至二十五日，云「見十方諸佛遍滿空中」。

至二十七日中後，泯然而臥，作兩炊久，方復動轉。自云，「上兜率天，見彌勒及諸菩薩，皆黃金色」。上手中自有一琉璃清淨甕，可高三尺許，以上彌勒，即放光明，照于上身。至兜率天，亦不見飲食。自然飽滿，故不復須人間食也。但聞人間食皆臭，是以不肯食。於彼天上得波利餅，將還，意欲與令法師。有人問，「何意將餅去」。答云，「欲與令法師」。是人言，「令法師是人中果報，那得食天上食」，不聽將去。既而欲見，令法師閑居，上爲迎法師來相見，語法師，「可作好菜食，以餉山中坐禪道人。若修三業，方得生兜率天耳」。^(七二)法師不坐禪，所以令作食餉山上道人者，欲使與坐禪人作因緣也。

自入八月，體中亦轉惡，不復說餘事，但云，「有三十二童子，一名功德天，二者名善女天，是迦毘羅所領，恒來在左右，與我驅使。或言得人餉飲食，令衆中行之」。復云，「空中晝夜作伎樂，闌人耳也」。

(大正五二・二七〇中—二七二上)

〔校勘略號〕各大藏經の開板年代は然沙(二〇〇〇)に従う。

金藏廣勝寺本〔『中華大藏經(漢文部分)』六三，北京：中華書局，一九九三〕……一一四九—七三年頃。

麗再

高麗大藏經藏再雕本……一二三六〇五一年年。

毘

(南宋) 毘盧大藏經(一名「福州開元禪寺版大藏經」)

〔宮内廳書陵部藏本〕……一一四八年(紹興戊辰)。

思

(南宋) 思溪大藏經〔宋思溪藏本廣弘明集〕八, 北京・

國家圖書館出版社, 二〇一八)……一二三九年。

磧

(南宋) 元) 磧砂大藏經〔延聖院大藏經局編〕宋版磧砂

大藏經〕三一, 臺北・新文豐出版公司, 一九八七)

……南宋) 元。

嘉

(明) 嘉興大藏經〔東京大學總合圖書館藏萬曆版大藏經

(嘉興藏) 徑山藏) デジタル版)

<https://dzkings.ln-tokyo.ac.jp/kkz/>

……一五八九〇一六七六年。

嚴本

嚴可均校輯『全梁文』卷三一 沈約「齊禪林寺尼淨秀行狀」

陳本

陳慶元(一九九五)『沈約集』原文

索引

劉・陳・何(二〇〇〇)『沈約集』原文

□★

大正藏校勘記(脚注)に誤りがあることを示す。本稿に示

す字は訂正後の正しい字である。

大正★

大正藏本文に誤植があることを示す。本稿に示す字は訂正

後の正しい字である。

◇

一字空格

校勘は、最初に採用した字と版本を示し、その後、金・麗再・
毘・思・磧・嘉の順に列挙する。金と麗再は同系統を成立順に示す。
その後に異系統の毘・思・磧・嘉を成立順に示す。

高麗初雕本は開寶藏に次ぐ最早期の大藏經であり、近年現存部分
が全て出版公開されたが、『廣弘明集』卷二三には缺失し、現存が確

認されていない。

〔校勘〕

(一)「益」金・麗再…「翳」毘・思・磧・嘉

(二)「羸」毘・溪・磧・嘉…「羸」金・麗再

(三)「阜于」麗再…「阜」金…「胤阜」毘・思・磧・嘉

(四)「刺」金・麗再…「刺」毘・思・磧・嘉

(五)「魚」金・麗再…毘・思・磧…「漁」嘉

(六)「亭」金・麗再…毘・思・磧・嘉…「鄉」比丘尼傳諸本

(七)「弱齡」毘・思・磧・嘉…「齡」金・麗再

(八)「獲」麗再…毘・思・磧・嘉…「穫」金

(九)「叔」金・麗再…毘・思・磧・嘉…「昇」毘

(一〇)「噉」金・麗再…毘・思・磧・嘉…「敢」比丘尼傳諸本

(一一)「外國普練道人」金・麗再…毘・思・磧・嘉…「外國沙門普

練」比丘尼傳諸本

(一二)「就」金・麗再…「受」毘・思・磧・嘉

(一三)「至年二十九」金・麗再…毘・思・磧・嘉…比丘尼傳思

嘉…「至十九」比丘尼傳再雕本

(一四)「綵」金・麗再…「繫」毘・思・磧・嘉

(一五)「青」金・麗再…「嘉」嘉…「精」毘・磧

(一六)「開」毘・思・磧・嘉…「開◇井」金…「開井」麗再

(一七)「淡」金・麗再…「憐」毘・思・磧・嘉

(一八)「牀」金・麗再…「嘉」嘉…「床」毘・思・磧・大正★

(一九)「拘」麗再…「拘」嘉…「勾」金…「鉤」毘・思★・磧

(二〇)「勿」金・麗再…毘・思・磧…「忽」嘉

(二一)「牀」金・麗再…毘・思★・磧・嘉…「床」大正★

- (二二)「受」金・麗再・毘・思・磧…「愛」嘉
 (二三)「曜」毘・思・磧・嘉…「耀」金・麗再★…「輝」大正★
 (二四)「鴉」金・麗再・思・磧・嘉…「鴟」毘
 (二五)「鸛」金・麗再…「鵠」毘・思・磧・嘉
 (二六)「後」金・麗再…「加復」毘…「後復」思・磧・嘉
 (二七)「日」毘・思・磧・嘉…「日」金・麗再
 (二八)「獨」金・毘・思・磧・嘉…「觸」麗再
 (二九)「違」金・毘・思・磧・嘉…「有」麗再
 (三〇)「多」金・麗再…「多有」毘・思・磧・嘉
 (三一)「鴻」金・麗再・毘・嘉…「鳴」思・磧
 (三二)「嗟」金・麗再・思・磧・嘉…「嗟」毘
 (三三)「斯」金・麗再・思・磧・嘉…「期」毘
 (三四)「才」金・麗再・思・磧・嘉…「子」毘
 (三五)「青」金・麗再・嘉…「精」毘・思・磧
 (三六)「大」金・麗再・思・磧・嘉…「太」毘
 (三七)「今」金・麗再・思・磧・嘉…「念」毘
 (三八)「牀」金・麗再★…「思」思・磧・嘉★…「床」大正★
 (三九)「青」金・麗再・嘉…「精」毘・思・磧
 (四〇)「閑」金・麗再・毘・思・磧…「閑」嘉
 (四一)「必」金・麗再…「畢」毘・思・磧・嘉
 (四二)「裝潢」嘉…「莊黃」金・麗再…「粧潢」毘・思★…「莊黃」大正★
 (四三)「伽羅」金・麗再…「羅伽」毘・思・磧・嘉
 (四四)「果」金・麗再・毘…「菓」思・磧・嘉・大正★
 (四五)「呿」金・麗再・磧・嘉…「法」毘・思
 (四六)「言」金・麗再…「云」毘・思・磧・嘉

- (四七)「甚」金・麗再・毘・思・磧…「堪」嘉
 (四八)「如所見」金・麗再・毘…「如所見倣」思・磧・嘉
 (四九)「始」金・麗再・思・磧・嘉…「如」毘
 (五〇)「此」毘・思・磧・嘉…「始」金・麗再
 (五一)「畢」金・麗再・嘉・興…「果」思・磧…「疑果是畢」毘
 (五二)「門」金・麗再・思・磧・嘉…「閤」毘
 (五三)「失」金・麗再・思・磧・嘉…「天」毘
 (五四)「機」金・麗再…「機」毘・思・磧…「稀」嘉
 (五五)「便」金・麗再…「更」毘・思・磧・嘉
 (五六)「牀」金・麗再★…「床」毘・思・磧・大正★
 (五七)「極篤」毘★…「思」思・磧・嘉★…「極爲綿薦」金・麗再★…「極爲綿篤」大正★
 (五八)「幡」金・麗再・毘・思・磧…「旛」嘉
 (五九)「牀」金・麗再★…「嘉」嘉★…「床」毘・思・磧
 (六〇)「差」金・麗再・嘉…「瘡」毘・思・磧
 (六一)「甚」金・麗再…「其」毘・思・磧・嘉
 (六二)「自不」金・麗再・毘・思・磧…「不自」嘉
 (六三)嚴本「不如此也。雖爲丈夫。不能精進。持戒不及。上時體已轉惡。」索引「不如此也。雖爲丈夫。不能精進。持戒不及。」上時體已轉惡。陳本「不如此也。雖爲丈夫。不能精進。持戒不及。上時體已轉惡。」
 (六四)「涼」金・麗再…「清涼」毘・思・磧・嘉
 (六五)「人人」大藏經諸本。「參考」索引は「人人」に改め、「排印本嚴可均輯本・全梁文」卷31頁325を根據とする。しかし嚴本は「人人」。
 (六六)「幡」金・麗再・毘・思・磧…「旛」嘉★

(六七) 「幡」金・麗再・毘・思・磧…「旛」嘉★
 (六八) 「軍隊」金・麗再…「隊」毘・思・磧・嘉
 (六九) 「幡」金・麗再・毘・思・磧…「旛」嘉★
 (七〇) 「以」金・麗再・思・磧・嘉…「已」毘盧★
 (七一) 「閑」金・麗再・毘・思・磧…「閑」嘉
 (七二) 陳本「語法師…可作好菜食，以餉山中坐禪道人，若修三業，方得生兜率天耳。」索引「語法師…可作好菜食，以餉山中坐禪道人。」若修三業，方得生兜率天耳。
 (七三) 「者名」金・麗再…「名」毘・思・磧・嘉

【現代語譯】

沈約「南齊禪林寺尼淨秀行狀」

比丘尼の釋淨秀は、本姓は梁氏、安定郡烏氏縣の人である。⁽³⁾

祖先是少昊の子孫であり、伯益が禹の治水を補佐し、嬴氏の姓を下賜された。⁽⁴⁾ 周の孝王の時、その(伯益の)十六代子孫である非子⁽⁵⁾を秦に封じた。その曾孫の秦仲は(周の)宣王の侯伯となった。⁽⁶⁾ (周の)平王が(洛陽に)東遷すると、秦仲の末子が梁に封ぜられ、梁伯となった。⁽⁷⁾ (前)漢の景帝の時(前一五七―一四二)、梁林が太原太守となり、北地の烏氏に居を移し、その結果、(安定)郡の人となった。それ以降、世に有力な一族として榮え、名聲も德行も具えた人々が焔めき、高位の官僚を代々輩出した。⁽⁸⁾

(後)漢の元嘉元年(後一五一)、梁景は尚書令となった。⁽⁹⁾ 彼は若い頃から『韓詩』を學び、儒學に廣く通じた者として世に知られた。⁽¹⁰⁾ (三國)魏の梁爽は、司徒左長史ならびに祕書監となり、諸書を涉

獵して奥深い理法をうまく語った。(西)晉の太始年間(二六五―二七四)、梁蘭は涼州と雍州の刺史となった。(この梁蘭が)〔淨秀〕尼の祖である。⁽¹¹⁾ 梁蘭の孫の梁搗は、(西)晉の范陽王虓の驃騎參軍事ならびに魚陽太守であった。永嘉の政亂(三一二)に遭遇し、僞趙のもとに身を落とし、祕書監ならびに征南長史となった。後に晉に戻り、散騎侍郎となった。(梁搗の)子の梁疇、字は道度は、征虜司馬であった。その子の梁之は宋に仕え、征虜府參軍事となり、龍川縣都亭侯に封ぜられた。⁽¹²⁾

〔淨秀〕尼は都亭侯(梁之)の四女である。遙か太古の昔から智慧を育み、卓越した理解を當年に身に付けた。氣質は穩やかで他の普通の子供と違った。小さい頃から精神は俊敏で、他の子供と比較にならないかった。仁徳を行い正しい道を尊び、心を佛法に傾け清らかにした。⁽¹³⁾

十歳になると、慈しみの心が益々強くなり、化粧で身を飾ることもなく、絢爛たる衣装も好まず、經典を誦え、佛道を行い、粗末な菜食に甘んじ續けた。⁽¹⁴⁾

十二歳で出家を願ったが、家族は苦々しく思い押し止め、首を縦に振らなかった。⁽¹⁵⁾ かくして心の中で感應あらんことを願い、思いを一つにしたところ、しばしば目出度いことに出会い、たちまち瑞祥が現れた。ひとり第四叔の梁超のみは逸早くこれに氣付き、内典や外典から譬えを用いて説得した結果、(上人の)氣高き思いが叶えられた。⁽¹⁶⁾

上人は生まれながらに聰明で、幼い頃から拔きん出ていた。七歳になると、誰から習うでもなく齋戒を守った。家に僧を招き佛教の儀をしてもらった時、『大般涅槃經』の讀誦を聞いて肉を食らってはならぬと知った。かくして直ちに蔬菜に甘んじ〔肉を〕攝らぬ生

活を長く貫き、両親にも知られると、肴や肉がお膳に上ったらいつも「上人はそつと」捨ててしまった。³⁵

かつて外國僧の普練³⁶が都に現れ、梁家の住居を往來したので、「上人は普練」から五戒を授かり、しつかり戒を守り、違反しなかった。来る日も来る日も禮拜と讀誦に明け暮れ、只管それだけに勵んだ。自分で字が書けるようになると、いつも寫經した。自らの持ち物を専ら功德を積むことだけに用い、俗世の快樂を離れた。³⁷

若くして佛道に入ること望んだものの、父母がそれを遮った結果、ただ歲月が流れていった。二十九歳になり、やっと始めて初志を貫いて青園寺で落髮し、³⁸寺主（業主尼）³⁹に師事した。上人は師に恭しく事え、孝順を盡くした。⁴⁰師の思いを最優先にして従い、身も心も盡くしたが、まだ足りないのではと心配する程であった。⁴¹自ら「身・口・意の」三業を修め、片時も懈けなかった。⁴²僧團の使いやその他様々な役務に、いつも眞つ先に名乗り出て、努力を惜しまず、事あるごとに攜わった。⁴³馬先生という菩薩は青園寺で上人を見るや、立ち所に「この比丘尼はきつと兜率天に往生するぞ」と預言した。⁴⁴

また、自ら佛殿の中で坐禪していると、「淨秀も含め」とともに集った三人は、にわかに空中に聲を聞き、それは牛がほえるようであった。二人の尼は驚き怖れて、正氣を失い震えあがったが、上人は平然として落ち着いており、ゆっくりと起ち上がって坐床から下り、僧房に歸ると燈明を手にとり、聲のした所を調べた。欄干のところまで戻ってくると、二尼はたちまち佛殿で人が「皆な道をあけよ、某甲師がお戻りだ」と言うのを聞いた。後にまた禪房中にて坐禪した折、同行の者が數人いた。そのうちの一人の尼僧がいびきをかいて居眠りした。⁴⁵この尼僧は夢の中で、頭が天井に届くほどの者がおり、「某甲師を驚かすな」と言うのを見た。そのため、この尼

僧はもう一度坐禪する勇氣がなかった。またあるとき坐禪していると、一人の尼僧がちよつとした用事のためしばらく坐床を下りようとしたが、ふと見ると、ある人が手をたたいて押しとどめ、「某甲師の邪魔をするな」と言った。そこで息を潜めそつと「禪房を」出て、いまだかつてなかった素晴らしいことと讚歎した。⁴⁶これらと類似することはとても多かつたが、すぐに記録しなかつたので、多くが漏れ失われて忘れ去られ、全て詳しく記載することはできない。

淨秀は天性の資質として戒律を受持し、その立ち居振る舞いにおいて必ず戒律を遵守しようとした。⁴⁷そこで慧曜律師に講義を依頼したが、ただ資金が一十しかなく、講會を開けないのではないかと心の中で心配した。すると夜、たちまち夢を見た。それはカラス・カササギ・ハツカチョウ（八哥鳥）・スズメらがそれぞれ車に乗り、その車はみな安車と軒車で、車の大きさもそれぞれ鳥の大きさにあうものであった。⁴⁸鳥たちは、「私は淨秀尼の講義を援助しに行こう」と聲を合わせた。この夢から覺めると、とても喜び、事業はきつと成功するであろうと分かつた。講義が始まるまで七十名の檀越の供物を設けることができたが、その「供物である」果物は皆、素晴らしかつた。

後日また、法穎律師に律の講義を依頼した。講義の開始日になると、清淨な甕の水が水園の香氣のような芳香を自然に發し、このためたいへん喜んだ。ほどなくして坐禪し三昧に入ることができ、中夜になってやっと始めて出定すると、他に同伴の者は誰もいなかった。すぐに「比丘尼が獨りであることを禁ずる戒律を犯したのではないか」と自ら思い、ただちに「法穎」律師に尋ねたところ、律師は「犯してはいない」と答えたが、それでもなお淨秀は迷い、律に違反したのではないかと恐れ續けた。

そしてまた、諸寺の尼僧が多く戒律を守っていないのを見て、「ああ、釋尊の素晴らしい美德善行が存在したのはそれほど遠い昔のことではないが、靈妙な遺業はしだいに潰えようとしている。過失を自ら引き受け自身を責めるのでなければ、どうして人々を導くことができるか」と嘆慨した。そこで自ら懺悔し、「出罪するための方法である」摩那埵を行った。これによって都の比丘・比丘尼たちは皆、「このように戒律に明るく、行動の準則が律法にかなう者ですら、なお過失を思っている。ましてや我々のように舉措動作に過ちが多いのに自ら恥じ恐れない者はなおさらそうしなければならぬ」と讃歎した。相共に全て懺悔し、そうしないものは誰もいなかった。

また南園にて法穎律師のもとで受戒した。受戒の日、清淨な甕の水が香ることまた前と同様であった。青園寺やその他の寺の尼僧たちは、みなあらためて戒を受けた。そこで律師もまた順番に寺を訪れ、戒律を伝えひろめ、偉大なる佛の教えを宣揚した。よってその戒律の典範はるかに及んで、今にまで至っている。また法穎律師は、諸寺院の尼僧に對し、高い寢臺や俗服を有する者はすべて改めるよう淨秀上人に伝えさせた。淨秀上人はその旨を遵奉して綱紀をひきしめ、すべてつつしんで拜受した。律の教えが盛んになったのは、まさにここから始まったのである。後にまた三藏法師のもとで受戒したが、清淨な水の香ることまた以前と同様であった。

青園寺の尼衆はすっかり多くなり、考えがあわなくなってきた。師はすでに遷化しており、側仕えすべき者もいなかった。そこで別に居住する場所を構えることで、外的修行としては聖者の規則である戒律を嚴格に守り、内的修行としては禪定を研鑽することができると考えた。

宋の大明七年（四六三）八月、もと修儀であった黃氏ならびに南昌公主は深く三寶を尊崇し、高德の行いを仰ぎ敬っており、初めて精舎を建立した。

上（淨秀尼）は麻の「粗末な」衣をまとってぬくぬくとせず豆葉ばかりの「貧しい」食事でも空腹を感じるがなかった。自ら泥土や瓦を手に執り、晝夜を問わず「伽藍造營に従事して」勤勉に働いた。

宋の泰始三年（四六七）、明帝から山號を下賜され、禪林寺と稱するに至った。淨秀は生來物靜か欲がなく、「その信心が」佛菩薩を動かして不思議な豫兆があった。かくして佛龕をうがって像を造り、備わらないものは何一つなかった。また多くの經典を書寫して集め、その全てを揃え充足させた。「經卷は」表装も料紙の染め上げも、何もかもがひとりで行われた。娑伽羅龍王の兄弟二人が來現した跡があり、「跡は」日が経つても消えず、同志たちがかわるがわるやつてきて、誰もが自らの目でこれをみた。招き入れられてともに住する者は十有餘人を數え、淨秀はみなを教え導いて禪定と經典の讀誦をさせた。「淨秀が」聖僧をお招きすると、供えられた果物の上にいつも必ず「何とも不思議な」手をつけた跡があった。

またある時、心を込めて多くの聖なる菩薩たちをお招きし、七日間供物でもてなした。まず禮拜と懺悔をした後、精神統一して觀想すると、二人の外國人僧が手を舉げて共に語らうのが見えた。一人は呾羅という名、もう一人は毘呾羅という名であった。「二僧の」身につけている袈裟が熟した桑の實のような色だったので、「淨秀は」泥を手に取り（自らの）衣の色を濁して「みすばらしくし」、見たままの色にした。かくして尼僧たちは遠きも近きもこぞってこれに倣い、着衣を「純色以外の」閒色に改めた。この結果、五大純

色の衣をまとう違反を斷ち、出家と在家は明確に區分できるようになった。

この後また、阿耨達池の五百羅漢を勸請し、そして凡人にも聖人にも分け隔てなく施食する大集會（無遮大會）を連日行い、二十日が経つ頃には供物は十分行きわたったので、さらに罽賓國の五百羅漢を勸請して（先の五百人と）併せて千人とした。さらにまた凡夫僧を先と同じ方法（無遮大會）で勸請した。勸請し始めて一日が過ぎた時、一人の外國人僧がいるのを見た。しかし僧衆はその僧と誰も面識がなかった。そこで試みに相手に訊ねてみると、外國僧は自ら「罽賓國から來た」と言った。さらに「ここ（中國）に來てどれ程になるか」と訊ねると、「ここに來てから一年になる」と答えた。僧たちは常人でないと悟り、門番に（その後の）様子を監視させた。果たして外國僧は食事を終えたと宋林門から出た。人に追跡させ、宋林門から離れたのは見えたが、十數歩行ったところで急に行方が分からなくなった。

また以前、聖僧を勸請して入浴させる際、器に香湯を盛り、様々な品を供物として捧げた。それに向かつて禮拜したところ、内も外も静まりかえっていた。いきなり器に柄杓の（當たる）音がし、水を使っているらしいのが聞こえた。「淨秀は」心中、人が現れたのかも知れないと思い、皆で行ってみると、「誰もいないのに」水と柄杓が自ずから搖れ動くのが見えるだけであつた。かくして（聖僧による）靈異であると分かった。

また以前、夜中にいきなり光明が部屋中に満ち溢れるのを見て、まさしく「すでに夜が明けた」と言い、自ら起き出て戸を開き外を見たが、まだ眞つ暗だつた。このため即座に戸を閉じ、寢床に還つた。ふたたび寢て長い時間がたつた頃、ようやく夜明けを迎えた。

また（別のある時）、淨秀は病になり重篤となつたが、突然、大いなる光明が世界に遍滿して、山や河、木々が何物にも妨げられず自在に廣がる様を目の當たりにし、嬉々として獨り微笑んだ。傍の者が奇異に思い訊ねると、尼は見たことを詳しく述べた。すぐさま起き上がった歩けるようになり、佛に禮拜し經典を讀誦し、様子は日頃と變わらなかつた。

さらにまたある時、再び病氣になり、甚だ危篤に陥つたとき、淨秀は急に兩手を挙げ、何か物を捧げるかのようで、傍の人に話しかけたが、「その人は」理解できず、「何を捧げているのですか」と訊ねると、「寶塔が地中から涌出するのが見える。それを迎え取りたい。〔塔は〕幡と花で飾られ樂舞が行われ、全てが揃っている」と答えた。こうして病はすっかり除かれ、再發しなかつた。

さらにもう一度病氣になり、數日中に病が非常に重くなつたので、東方を向いて、空に向かつて合掌した。ある時、急いで佛に供えるお香を焚いて燈をつけることを要求して、しばらく合掌し續けた。ちやうどその時に自ら「彌勒佛と舍利弗や目連等の聖人を見た」と言つた。また、無數の佛弟子が虚空に溢れるのを自ら見て、やがて彌勒が翅頭末城に下生するのを見て、「ある人が幡蓋や花や舞樂と三つの臺（うてな）を持ってここに來迎した。上人の〔ために〕攜えて來た」幡蓋や花々、舞樂はこの世の比でなかつた。彼らは中空で停まつた。〔三つの臺のうち〕一つの臺はもう半分過ぎまで降りていたが、一つの臺はまだそこまで達していなかつた。そして〔残りの〕一臺はまだ姿も見えず、何かが存在する音が聞こえるだけだつた。その時に〔最初の〕二つの臺は完成していた。これを兆しとしたりのためにただちに更にもう一臺を作つた」と言つた。さらに言つた、「私の床」の側に寶玉の花をつけた木枝が二本あるから、人が床に

近づいて來たら、「我の花を壊さないで」と言つて欲しい」。これ以後、病はすっかり治つた。

相い前後して病氣になつた時、いつも瑞祥⁽¹⁸⁾が兆した。ある時は涼風⁽¹⁸⁾が起こり、ある時は妙藥⁽¹⁸⁾を手に入れ、ある時に異香⁽¹⁸⁾を嗅ぎ、「このような瑞祥が生じると」病はすぐに治つたのだつた。病が治る様は、當然として兆候⁽¹⁸⁾があつて、「その後」すっきりと治るのである。このようなことは數多く起こり、それを全て記載することはできない。

また天監三年（五〇四）夏、病にかかつた。晝に睡眠中に虚空藏菩薩を見た。すぐに「夢の中で」自ずから「菩薩のまわりを」廻りながら經を唱え、その聲が夢の外まで達した。眠りから覺めると患つたものが除かれた。さらに晝に横になつていて、目を開けると佛が房に入つて幡・華蓋⁽¹⁹⁾が屋に満ちていることを見た。そばにいる人に言つて香を焚かせると、すっかり消え失せた。

上人は天監五年（五〇六）六月十七日に病氣になつた。⁽¹⁹⁾胸の痛みに苦しみ水すら飲めなかつた。彭城寺の令法師は、六月十九日の夜の夢で、ある場所をみたが、これは兜率天の上だつた。この住處はとてもおごそかで綺麗であり、この世のものではなかつた。これは上人が住む場所だと思つと、すぐに上人がその中にいるのが見えた。そこで法師が上人に言うに、「上人は好いところに生まれることができます。（私を）教え導きで引見してもらわなければなりません。上人（こそが眞の）法師です。ちつぽけなこの私を支えてくれる御方ですから、私をお捨てになるなかれ」と。上人がただちに答えて言うに、「法師は男性であり、かつ經典や教理についても廣く通達していますので、ご自身で高い境地にすることができるとしよう。わたくしは女ですから、何の役にも立ちません」。法師がまた言う

に、「そうではありません。男だといつても精進することができず、戒律を守ることは（上人に）及びません」と。

上人はその時に體が更に衰弱し、令法師と普段から疎遠で、面會できなくなつた。病狀は次第に酷くなり、粥をすすする量も日ごとに減つたので、治療してもよくならず、次第に重篤となつた。

〔天監五年（五〇六）七月十二日、その時、雨が降つて涼やかになり、苦しい狀態が少し和らいだ。そして自ら「夢で來迎を見ました。その來迎は佛殿の西の上までやつて來て、皆それぞれ幢の付いた竿を手にするさまは車が地に下り立つたかのようにでした。幢の筋道（使い方）⁽²⁰⁾は、世の軍隊の擔鼓（樂器の二）や幢竿と同じでした。〕と言つた。

七月二十日、「食は」途絶え、もう粥をすすめるのもやめた。

七月二十二日、顔見知りの出家者たちを呼び出して會い、別れを告げるようだった。⁽²¹⁾

七月二十五日、「十方諸佛が天空に満ち溢れるのが見える」と言つた。

二十七日正午過ぎ、意識朦朧として臥せ、食事二度ほどの長い時間の後やつと體を動かし、自ら「兜率天に上つている。彌勒菩薩や他の諸菩薩が皆な金色なのが見える」と言つた。⁽²²⁾上人は、美しい琉璃の、高さ三尺ほどの徳利瓶を手につけていて、それを彌勒に奉つたところ、光を放ち、上人の體を輝かせ、「上人は」兜率天まで登つた。そこにはやはり飲食物を見なかつたが、自ずと満腹したので、人間の食べ物は要らなかつた。人間の食べ物を嗅いだだけで臭く、だから食べたいと思わなかつた。「兜率」天で波利婁を得ると、持つて歸つて令法師に渡そうとしたところ、ある人が「どうして餅を持つて行くとするのか」と問うたので、「上人は」令法師

に差し上げたいと思う」と答えた。その人が「令法師は人に生まれるという果報を受けたのだから、どうして天界の食物を食べられようか」と答えたが、「上人は」許されないのに持ち去った。しばらくして面會したいと思ったとき、令法師は獨りでいたので、上人は法師を歡待して、法師に「よい野菜を作って山で坐禪する修行者にふるまうがよいでしょう。(身・口・意の)三業をしつかり修練して、やっと始めて兜率天に生まれられます」と話した。法師は「自分は」坐禪しなかったので、「上人が令法師に命じて」食物を作り山の修行者にふるまわせた理由は、坐禪する修行者と繋がりを持たせたいと思ったからだだった。

八月に入り、「上人の」體調はどんどん悪化し、何も言わなくなり、ただ「三十二人の童子と、一は功德天という名の、もう一は善女天という名の神がいて迦毘羅神王に仕え、いつもやって来て左右に侍り、私のために働いた。誰かが、食べ物を布施するなら全員にふるまえと言っています」と話ただけだった。更に「天空は晝も夜も踊りと音楽が騒々しい」と言った。

【注】

- (1) 「南齊」大藏經諸本は「南齊」に作るが、問題なしとしない。恐らくこれは唐の道宣が『廣弘明集』を編纂した際に道宣が改めたのであろう。撰者沈約の頃にはまだ北齊が存在していないから、南齊という呼稱も存在しなかった。因みに嚴本は「南齊」でなく「齊」に作る。さらに齊にせよ南齊にせよ、王朝表記は淨秀尼が齊代に卒したことを含意するが、本行狀の末に示す通り、淨秀尼は梁の天監五年八月まで存命していたから、淨

秀の卒年も沈約の撰述年代も齊でなく梁に入ってからのことである。かく本行狀の書名は問題を含むけれども、改めるべき異本を見出せないで、今は暫く大藏經諸本の表記のままとする。

- (2) 「行狀」『文選』卷六〇任昉「齊竟陵文宣王行狀」、劉良注「述其德行之狀」。『文心雕龍』書記「狀者、貌也。體貌本原，取其事實，先賢表謚，竝有行狀、狀之大者也」。

- (3) 「本姓梁氏，安定烏氏人也」『史記』匈奴列傳『集解』烏氏「徐廣曰，在安定」。同『正義』「氏晉支」。「括地志」云，烏氏故城在涇州安定縣東三十里。周之故地，後入戎，秦惠王取之，置烏氏縣也。

『後漢書』梁統傳「梁統字仲寧，安定烏氏人，晉大夫梁益耳，即其先也」(『東觀記』曰「其先與秦同祖，出於伯益，別封於梁」。梁益耳見『左傳』。氏晉支)。統高祖父子都，自河東遷居北地，子都子橋，以貲千萬徙茂陵，至哀、平之末，歸安定」。

- (4) 「少昊」『春秋左氏傳』昭公十七年「郊子曰，我高祖少皞，摯之立也，鳳鳥適至，故紀於鳥，爲鳥師而鳥名」，『杜預注』「少皞，金天氏，黃帝之子，己姓之祖也」。

- (5) 「至伯益佐禹治水」『史記』鄭世家「秦，嬴姓，伯翳之後也，伯翳，佐舜，懷柔百物」。「史記」秦本紀「索隱」「尋費後以爲氏，則扶味反爲得。此則秦、趙之祖，嬴姓之先，一名伯翳，『尚書』謂之「伯益」，『系本』、『漢書』謂之「伯益」是也。尋檢『史記』上下諸文，伯翳與伯益是一人不疑」。「論衡」逢遇「故舜王天下，皋陶佐政，北人無擇深隱不見。禹王天下，伯益輔治，伯成子高委位而耕」，『同』談天「禹之治洪水，以益爲佐。禹主治水，益之記物」。「漢書」地理志「嬴，伯益之後也。伯夷能禮於神以佐堯，伯益能儀百物以佐舜，其後皆不失祠，而未有興者，

周衰將起，不可偏也」。

- (6) 「賜姓嬴氏」『史記』秦本紀「秦之先，帝顓頊之苗裔孫曰女修。女修織，玄鳥隕卵，女修吞之，生子大業。大業取少典之子，曰女華。女華生大費，與禹平水土。已成，帝錫玄圭。禹受曰：『非予能成，亦大費爲輔』。帝舜曰：『咨爾費，贊禹功，其賜爾阜游。爾後嗣將大出』。乃妻之姚姓之玉女。大費拜受，佐舜調馴鳥獸，鳥獸多馴服，是爲柏翳。舜賜姓嬴氏」。『說文解字』女部「嬴。少昊氏之姓也。从女，嬴省聲」。次注も見よ。

- (7) 「周孝王時，封其十六世孫非子於秦」『史記』秦本紀「非子居大丘，好馬及畜，善養息之」。『漢書』地理志下「秦之先曰柏(伯)益，出自帝顓頊，堯時助禹治水，爲舜朕虞，養育草木鳥獸，賜姓嬴氏。歷夏，殷爲諸侯。至周有造父，善馭習馬，得華駟，綠耳之乘，幸於穆王，封於趙城，故更爲趙氏。後有非子，爲周孝王養馬汧、渭之間。孝王曰：『昔伯益知禽獸，子孫不絕』。乃封爲附庸，邑之於秦，今隴西秦亭秦谷是也。至玄孫，氏爲莊公，破西戎，有其地。子襄公時，幽王爲犬戎所敗，平王東遷，離。襄公將兵救周有功，賜受郊、酆之地，列爲諸侯。後八世，穆公稱伯，以河爲竟。十餘世，孝公用商君，制轅田，開阡伯，東雄諸侯。子惠公初稱王，得上郡、西河。孫昭王開巴蜀，滅周，取九鼎。昭王曾孫政并六國，稱皇帝，負力怙威，燔書坑儒，自任私智。至子胡亥，天下畔之」。

- (8) 「其曾孫秦仲爲宣王侯伯」『史記』秦本紀「秦嬴生秦侯。秦侯立十年，卒。生公伯。公伯立三年，卒。生秦仲」。同「秦仲立三年，周厲王無道，諸侯或叛之。西戎反王室，滅犬丘大駱之族。周宣王即位，乃以秦仲爲大夫，誅西戎。西戎殺秦仲。秦仲立二十三年，死於戎。有子五人，其長者曰莊公。周宣王乃召莊

公昆弟五人，與兵七千人，使伐西戎，破之。於是復豫秦仲後，及其先大駱地犬丘并有之，爲西垂大夫」。『史記』十二諸侯年表「秦仲(『索隱』，非子曾孫，公伯之子。宣王命爲大夫，誅西戎也)，十四年」。

- (9) 「平王東遷，封秦仲少子梁伯於梁，是爲梁伯」『史記』劉敬傳「正義」『公羊傳』云，「東周者何。成周也。西周者何。王城也。按，周自平王東遷，以下十二王皆都王城，至敬王乃遷都成周，王赧又居王城也」。杜預「春秋序」『周平王，東周之始王也』。『元和姓纂』卷五，十陽，梁「秦仲有功，周平王封其少子康于夏陽，是爲梁伯」。

- (10) 「梁林爲太原太守」未詳。

- (11) 「昌阜於世」『春秋左氏傳』襄公二十六年「韓氏其昌阜於晉乎」，『杜預注』「阜，大也」。『晉書』潘岳傳付從子尼(潘尼)傳「孝治家邦，光照九有。純嘏自晉，永世昌阜」。

- (12) 「名德交暉，蟬冕疊映」未詳。

- (13) 「梁景爲尚書令」未詳。

- (14) 「少習『韓詩』」『後漢書』李恂傳「李恂字叔英，…少習『韓詩』，教授諸生常數百人」，同「李賢注」『韓嬰所傳『詩』也』。『參考』『文學源流』『魯詩』亡於西晉，『齊詩』亡於曹魏，『韓詩』亡於北宋。

- (15) 「爲世通儒」『後漢書』賈逵傳「逵所著經傳義詁及論難百餘萬言，又作詩、頌、書、連珠、酒令凡九篇，學者宗之，後世稱爲通儒」。

- (16) 「魏時梁爽」未詳。

- (17) 「梁蘭」未詳。

- (18) 「卽尼之迺祖也」『參考』『書』盤庚上「古我先王，暨乃祖、乃

父，胥及逸勤」。

(19) 「聞孫搦」 未詳。

(20) 「晉范陽王虓」 司馬虓（二七〇—三〇六）。『晉書』范陽康王綏傳付虓傳「虓字武會，少好學馳譽，研考經記，清辯能言論。以宗室選拜散騎常侍，疊遷尚書。出爲安南將軍、都督豫州諸軍事、持節，鎮許昌，進位征南將軍。……會惠帝西遷，虓與從兄平昌公模、長史馮嵩等刑白馬唾血而盟，推東海王越爲盟主，虓都督河北諸軍事、驃騎將軍、持節，領豫州刺史。劉喬不受越等節度，乘虛破許。虓自拔渡河，王浚表虓領冀州刺史，資以兵馬。虓入冀州發兵，又南濟河，破喬等。河間王顥聞喬敗，斬張方，傳首於越。越與虓西迎帝，而顥出奔。於是奉天子還都，拜虓爲司徒。永興三年（三〇六）暴疾薨，時年三十七」。

(21) 「子疇字道度」 未詳。

(22) 「龍川縣都亭侯」 龍川縣は南海郡に屬す。『漢書』地理志，南海郡「龍川（師古曰，『裴氏廣州記』云，本博羅縣之東鄉也，有龍穿地而出，即穴流泉，因以爲號）。都亭侯を，『比丘尼傳』淨秀尼傳の該當箇所は「都鄉侯」に作る。

(23) 「挺慧悟於曠劫」 『後漢書』楊賜傳「華嶽所挺，九德純備。李賢注「挺，生也」。『高僧傳』卷六，慧次傳「沙門智藏、僧旻、法雲等，皆幼年俊朗，慧悟天發，竝就次請業焉」（大正五〇・三七九下）。『同』卷六，廬山慧遠傳「（慧）遠藉慧解於前因，發勝心於曠劫，故能神明英越，機鑒遐深」（大正五〇・三五八上）。

(24) 「和綽」 用例未詳。

(25) 「行仁尚道」 『孟子』公孫丑上「以力假仁者霸，霸必有大國，以德行仁者王，王不待大」。『韓氏外傳』卷三「凡學之道，嚴師爲難。師嚴然後道尊。道尊然後民知敬學。故太學之禮，雖詔於

天子，無北面，尊師尚道也。故不言而信，不怒而威，師之謂也」。

(26) 「洗志法門」 （西晉）竺法護譯『普曜經』卷一「若得佛道時，轉法雨甘露，淨洗其心垢，諮受最法門」（大正三・四八八中）。

(27) 「慈念」 （後秦）佛陀耶舍・竺佛念共譯『長阿含經』卷一三「具諸戒行，不害衆生。捨於刀杖，懷慙愧心，慈念一切，是爲不殺。捨竊盜心，不與不取，其心清淨，無私竊意，是爲不盜」（大正一・八三下）。

(28) 「粉黛」 『韓非子』顯學「故善毛嬙、西施之美，無益吾面，用脂澤粉黛，則倍其初」。

(29) 「參考」 『比丘尼傳』卷四，淨秀尼傳「年十二，便求出家，父母禁之」。

(30) 「先覺」 『論語』憲問「不逆詐，不億不信，抑亦先覺者，是賢乎」。

(31) 「開譬」 （劉宋）功德直譯『菩薩念佛三昧經』卷五「我今當說譬況之法成滿此義，如有智人開譬，則解」（大正一三・八二五下）。（梁）法雲『法華義記』卷七「此譬說中，亦有三段。第一開譬。第二合譬。第三舉外譬帖結也。就開譬中自有五譬，即譬上五種法說本。第一明將導譬。第二懈退譬。第三設化城譬。第四知止息譬。第五將至寶所譬也」（大正三三・六五四中）。

(32) 「雅操獲遂」 僧祐『法祖法師傳』（『出三藏記集』卷一五）「帛遠字法祖，本姓萬氏，河內人。……志欲潛遁隴右，以保雅操。會張輔爲秦州刺史，鎮隴上，祖與之俱行」（大正五五・一〇七上）中，『高僧傳』卷一，帛遠傳，大正五〇・一〇七中。『晉書』伍朝傳「伍朝字世明，武陵漢壽人也。少有雅操，閑居樂道，不修世事。性好學，以博士徵，不就」。梁武帝『淨業賦（并序）」

〔廣弘明集〕卷二九「少愛山水，有懷丘壑，身羈俗羅，不獲遂志」（大正五二・三三五下）。

(33) これ以降，原文「上」は，上人すなわち淨秀尼を指す敬稱。

(34) 「不聽食肉」南本『大般涅槃經』卷四「善男子，從今日始，不聽聲聞弟子食肉。若受檀越信施之時，應觀是食如子肉想。迦葉菩薩復白佛言，世尊，云何如來不聽食肉。善男子，夫食肉者，斷大慈種」（大正一二・六二六上）。（東晉）法顯譯『大般泥洹經』卷三「善男子，我從今日制諸弟子不聽食肉。設得餘食，常當應作食子肉想。云何弟子而聽食肉。諸佛所說，其食肉者斷大慈種」（大正一二・八六八下）。

(35) 「於是即長蔬不噉，二親覺知，若得魚肉，輒便棄去」〔比較〕『比丘尼傳』卷四，淨秀尼傳は「噉」を「敢」に作り，「即便蔬食，不敢令二親知。若得鯉鱗，密自棄之」とする。

(36) 「外國普練道人」普練は未詳。ただし『比丘尼傳』淨秀尼傳の對應箇所「外國沙門普練」とあるので，普練は沙門すなわち男性出家僧（比丘）である。（後秦）鳩摩羅什譯『大智度論』卷三六「得道者，名爲道人。餘出家未得道者，亦名爲道人」（大正二五・三二四中），『同』卷六一「如實得道者名道人。今未得道者，衣服法則隨得道者故，亦名道人」（大正二五・四九五下）。『世說新語』言語「支道林常養數匹馬，或言道人畜馬不韻，支曰，貧道重其神駿」。同「竺法蘭在簡文坐，劉尹問，道人何以在朱門」。

(37) 「不營俗好」『三國志』吳書，魯肅傳「肅年四十六，建安二十二年卒。權爲舉哀，又臨其葬。諸葛亮亦發哀」，裴松之注「吳書」曰，肅爲人方嚴，寡於玩飾，內外節儉，不務俗好。治軍整頓，禁令必行，雖在軍陳，手不釋卷。又善談論，能屬文辭，

思度弘遠，有過人之明。周瑜之後，肅爲之冠」。

(38) 「至年二十九」『比丘尼傳』淨秀尼傳の對應箇所を，麗再は「至十九」に作り，毘・思・嘉は「至二十九」に作る（大正五〇・九四五上）。淨秀尼の出家の遅延という話の筋から二十九とすべきか。

(39) 「青園」『南朝寺考』青園尼寺「青園尼寺，在覆舟山下。宋元嘉二年（四二五），駙馬王景琰爲母范氏以王坦之祠堂地與尼業首爲精舍。十五年（四三八），潘淑儀施西營地以足之。內有七佛殿二間，泥塑精絕。後廢帝昱嘗乘露車以至此寺焉。又有比丘尼淨秀，宋都亭侯梁粲之女也，亦落髮於寺中云。考證。『建康實錄』，宋元嘉二年（四二五）置青園寺，東北去縣二里。案『塔寺記』，駙馬王景琰爲母范氏以王坦之祠堂地與比丘尼業首爲精舍。十五年（四三八），潘淑儀施西營地以足之，起殿。又有七佛殿二間，泥塑精絕，後代希有及者。○『南史』宋後廢帝紀，帝又於蠻岡賭跳，因乘露車，無復鹵簿，往青園尼寺。○沈約「齊禪林寺尼淨秀行狀」，比丘尼釋淨秀，本姓梁氏，安定烏氏人也。父粲之仕宋，征虜府參軍，封龍川縣都亭侯。尼年十九，方獲如志，落髮青園，服膺事主」。

(40) 「青園寺主」業首尼（三七三・四六二）。『比丘尼傳』淨秀尼傳に「青園寺首尼」とある。『比丘尼傳』卷二，東青園寺業首尼傳。

(41) 「事師虔孝」『禮記』檀弓上「事親有隱而無犯，左右就養無方，服勤至死，致喪三年。事君有犯而無隱，左右就養有方，服勤至死，方喪三年。事師無犯無隱，左右就養無方，服勤至死，心喪三年」。「虔孝」，未詳。

(42) 「先意承旨」『禮記』祭義「君子之所爲孝者，先意承志，諭

父母於道」。『韓非子』八奸「此人主未命而唯唯，未使而諾諾，先意承旨，觀貌察色以先主心者也」。

(43) 「猶懼弗及」『論語』先進「子曰：過猶不及」。

(44) 「三業」業（行為・活動）を身業（身體的活動）・口業（言語活動）・意業（また「心業」とも。精神活動）の三種に區分する。

(45) 「夙夜匪懈」『詩』大雅，烝民「既明且哲，以保其身，夙夜匪解，以事一人」。『禮記』祭統「其勤公家，夙夜不解」。揚雄『元后誄』「穆穆明明，昭事上帝，弘漢祖考，夙夜匪懈，威繼絕，博立侯王」。

(46) 「僧使衆役」（東晉）僧伽提婆譯『增壹阿含經』卷二八「是時目連受四部之教，屈申臂頃，往至三十三天，到如來所。是時釋提桓因及三十三天，遙見目連來。諸天各生此念，『正是僧使。若當是諸王之使，是時諸天皆起往迎，善來尊者』」（大正二・七〇六下）。『三國志』吳書，華覈傳「夫財穀所生，皆出於民，趨時務農，國之上急。：到秋收月，督其限入，奪其播殖之時，而責其今年之稅，如有逋懸，則籍沒財物，故家戶貧困，衣食不足，宜暫息衆役，專心農桑，古人稱一夫不耕，或受其飢，一女不織，或受其寒，是以先王治國，惟農是務」。

(47) 「觸事關涉」郭璞『方言』序「余少玩雅訓，旁味方言，復爲之解。觸事廣之，演其未及，摘其謬漏，庶以燕石之瑜，補琬琰之瑕。未詳撰者『大般涅槃經集解』卷三八「寶亮曰，第五段，結捨果也，亦同在初地。夫四無量行，本相關涉，不得相離。今言『得平等地』者，是登初地日，得真無漏也。見法體空故，以『空平等』爲名」（大正三七・四九九中・下）。

(48) 「馬先生」未詳。『比丘尼傳』淨秀尼傳「時有馬先生，世呼神人也」。

(49) 「開土」異文「開井土」は意味を理解しがたいので「開土」すなわち菩薩の意に解する。（唐）慧琳『一切經音義』卷一六「開土（梵語菩薩者也，謂以法開道之士，故名開土也）」（大正五四・四〇七上）。假に「開井土」ならば井戸掘り師となろうが文脈を解し難い。

(50) 「此尼當生兜率天也」失譯『菩薩五法懺悔文』「捨去身命時，佛放光明，滅除一切難障，化生兜率天，面觀慈氏尊，修相盡具足，六根普聰徹，聞佛說妙法，即悟無生忍，皆住不退地」（大正二四・一一二下）。（東晉）佛陀跋陀羅譯『觀佛三昧經』卷二「若坐不見，當入塔觀。入塔觀時，亦當作此諸光明想，至心合掌胡跪諦觀。一日至三日，心不錯亂。命終之後，生兜率天，面見彌勒菩薩色身端嚴，應感化導」（大正二五・六五六上・中）。

(51) 「坐禪」（東晉）法顯譯『大般涅槃經』卷中「夫出家法，坐禪之業最爲第一，調伏情根，使心不亂，專精寂靜，莫能驚恐」（大正一・一九七下）。

(52) 「迷悶」『北齊書』卷四四、儒林傳、權會「會亦不覺墮驢，因爾迷悶，至明始覺」。

(53) 「戰慄」『論語』八佾「使民戰栗」。朱熹集注「戰栗，恐懼貌」。『戰國策』楚策四「襄王聞之，顏色變作，身體戰慄」。

(54) 「淡然自若」『國語』越語下「自若以處，以度天下」韋昭注「若，如也。自如，無妄動也」。『莊子』德充符「死生存亡，窮達貧富，賢與不肖毀譽，飢渴寒暑，是事之變，命之行也。日夜相代乎前，而知不能規乎其始者也。故不足以滑和，不可入於靈府」。郭象注「苟知性命之固當，則雖死生窮達，千變萬化，淡然自若，而和理在身矣」。『莊子』大宗師「彼，遊方之外者也。而丘，遊方之內者也」。郭象注「夫理有至極，外內相冥，未有極

遊外之致而不冥於內者也，未有能冥於內而不遊於外者也。故聖人常遊外以冥內，無心以順有，故雖終日見形而神氣無變，俯仰萬機而淡然自若。成玄英疏「雖復事變命遷，而隨形任化，淡然自若，不亂於中和之道也」。

(55) 「徐起下牀」『十誦律』卷四一「若欲下床時，應徐下一脚，次下第二脚，安徐起」(大正三·二九八中)。

(56) 「拘欄」鉤欄。『水經注』卷二：「河水，經「又東入塞，過敦煌、酒泉、張掖郡南」，注「按段國『沙州記』，吐谷渾于河上作橋，謂之河厲，長百五十步，兩岸礫石作基陸，節節相次，大木從橫，更相鎮壓，兩邊俱平，相去三丈，竝大材，以板橫次之，施鉤欄甚嚴飾」。唐慧琳『一切經音義』卷二五「欄楯。上力干反，下食允反。謂周匝拘欄，橫曰欄，縱曰楯也」(大正五四·四六五中)。

(57) 「旋」『詩』小雅，黃鳥「言旋言歸，復我邦族」。

(58) 「伴類」(西晉)竺法護譯『賢劫經』卷一「我等之伴類，獨處若衆中，所宿無所畏，不貪求利養，頒宣尊佛道」(大正一四·一〇上)。

(59) 「鼾眠」(東晉)僧伽提婆譯『中阿含經』卷五七「瞿曇。昔時沙門瞿曇數在大衆，無量百千衆圍遶說法，於其中有一人鼾眠作聲，又有一人語彼人曰，「莫鼾眠作聲。汝不欲聞世尊說微妙法，如甘露耶」。彼人即便默然無聲」(大正一·七八二中)。

(60) 「小緣事」(劉宋)求那跋陀羅譯『雜阿含經』卷三四「瞿曇。我爲小緣事至那利伽聚落，營事訖已，暫過沙門迦旃延，以如是義、如是句、如是味問沙門迦旃延，彼亦以如是義、如是句、如是味答我所問，如今沙門瞿曇所說」(大正二·二四五中)。

(61) 「抵掌」(後漢)許慎『說文解字』十二篇上「抵，側擊也」。

(唐)慧琳『一切經音義』卷八七「抵掌(上之介反)」。『孝聲』云，抵，側擊也。側手投於掌也」(大正五四·八六四中)。

(62) 「閉氣」『大智度論』卷二四「於是自忍，眠目不視，閉氣不息。憐愍此人，爲持戒故，一心受剝，不生悔意」(大正二五·一六二上)。

(63) 「歎未曾有」(吳)支謙譯『太子瑞應本起經』卷上「當此之時，疆場左右，莫不雅奇，歎未曾有」(大正三·四七四上)。

(64) 「比類」干寶『搜神記』序「衛朔失國，二傳互其所聞。呂望事周，子長存其兩說。若此比類，往往有焉」。

(65) 「漏忘」(吳)支謙譯『菩薩本業經』「誦讀經偈，當願衆生，博解諸法，無復漏忘」(大正一〇·四四九中)。「南齊書」王僧虔傳「時太祖輔政，僧虔上表曰，『宜命有司，務勲功課，緝理遺逸，迭相開曉，所經漏忘，悉加補綴』」。

(66) 「具載」(吳)康僧會譯『六度集經』卷一「昔者菩薩爲大國王，理民以慈，恕己度彼，月月巡行貧乏，拔濟鰥寡，疾藥糜粥。每出巡狩，則命後車具載衆寶衣被醫藥，死者葬之」(大正三·二下)。「宋書」律曆志上「續漢志具載其律準度數」。

(67) 「進止俯仰」『漢書』薛宣傳「宣爲人好威儀，進止雍容甚可觀也」。南本『大般涅槃經』卷二三「若人睡時不能進止俯仰視胸，不覺苦樂，不應有我。若以進止俯仰視胸，知有我者，機關木人亦應有我」(大正二·六八八下)。

(68) 「遵承」『後漢書』劉蒼傳「惟陛下審覽虞帝優養母弟，遵承舊典，終卒厚恩」。

(69) 「曜律師」栖玄寺慧曜律師。生卒年不明。『比丘尼傳』淨秀尼傳「欲請曜法師講十誦律」(大正五〇·九四五上)。「高僧傳」卷一一，道儼傳付慧曜傳「時栖玄寺又有釋慧曜者，亦善十誦」。

(大正五〇・四〇一中)。

- (70) 【鸛鵒】 鸛鵒。『左傳』昭公二十五年，經「有鸛、鵒來巢」。『漢書』五行志「鸛鵒，夷狄穴藏之禽，來至中國，不穴而巢，陰居陽位，象季氏將逐昭公，去宮室而居外野也」。顏師古注「今之鸛鵒，中國皆有，依周官而言，但不踰濟水耳。左氏以爲魯所常無，故異而書之。而此云夷狄禽，未喻其意。又此鳥本亦巢居，不皆穴處也」。

- (71) 【安】 『周禮』春官，巾車「安車，彫面鷩總，皆有容蓋」。鄭玄注「安車，坐乘車。凡婦人車皆坐乘」。

- (72) 【軒】 『左傳』哀公十五年「大子與之言曰，『苟使我入獲國，服冕乘軒，三死無與』」。杜預注「軒，大夫車」。『續漢書』輿服志上「前驅有九旂雲罕，鳳皇闐戟，皮軒鸞旗，皆大夫載」。劉昭注引胡廣曰「皮軒，以虎皮爲軒」。

- (73) 【稱可】 南本『大般涅槃經』卷三四「若有比丘具是十想，即得稱可沙門之相」(大正二二・八三七下～八三八上)。

- (74) 【果食】 (前秦)竺佛念譯『鼻奈耶』卷八「食有五種。一根食。根食者，藕、蘆蔔、繫婆陀。二莖食。莖食者，竿炙叔基諸所食菜。三爲葉食。諸所食葉。四爲華食。婆婆羅梨華婆婆。五爲果食。諸所食果，蒲萄、甘橘」(大正二四・八八七上～中)。(後秦)鳩摩羅什譯『十誦律』卷二六「何等五種佉陀尼。一根食，二莖食，三葉食，四磨食，五果食。：何等果食。菴羅果、閻浮果、波羅薩果、鎮頭佉果、那梨耆羅果，如是等種種，是果佉陀尼」(大正二三・一九三下～一九四上)。

- (75) 【穎律師】 法穎律師(四一六～四八二)。『高僧傳』卷一一，法穎傳「釋法穎，姓索，燉煌人。十三出家爲法香弟子，住涼州公府寺。與同學法力俱以律藏知名。穎伏膺已後，學無再請，記在

一聞。研精律部，博涉經論。元嘉末，下都止新亭寺。孝武南下，改治此寺。以穎學業兼明，敕爲都邑僧正。後辭任，還多寶寺。常習定閑房，亦時開律席。及齊高卽位，復敕爲僧主。資給事事有倍常科。穎以從來信施，造經像及藥藏，鎮於長干。齊建元四年卒，春秋六十有七。撰『十誦戒本』并『羯磨』等」(大正五〇・四〇二上)。『比丘尼傳』卷二，寶賢尼傳「元徽二年(四七四)，法穎律師於晉興寺開『十誦律』。穎其日有十餘尼，因下講欲重受戒。賢乃遣僧局齋命到講座。鳴木宣令諸尼不得輒復重受戒。若年歲審未滿者，其師先應集衆懺悔竟，然後到僧局，僧局許可，請人監檢，方得受耳。若有違拒，即加擯斥。因茲已後，矯競暫息」(大正五〇・九四一上)。

- (76) 【中夜】 子(午後十一時～午前一時頃)。鳩摩羅什譯『十住毘婆沙論』卷六「以恭敬相故，右膝著地偏袒右肩合掌。是事應初夜一時禮一切佛，懺悔勸請隨喜迴向。中夜、後夜皆亦如是。於日初分、日中分、日後分亦如是。一日一夜，合爲六時，一心念諸佛，如現在前」(大正二六・四七中)。

- (77) 【犯獨】 『十誦律』卷四二「若比丘尼一身獨宿，乃至一夜，是法初犯僧伽婆尸沙，可悔過。夜者，從日沒至地未了，是中間名夜」(大正二三・三〇八上)。『十誦比丘尼波羅提木叉戒本』「若比丘尼，若夜若晝，若異聚落若異界，若度水彼岸，一身獨宿，是法初犯僧伽婆尸沙，可悔過」(大正二三・四八〇中)。

- (78) 【猶豫】 『楚辭』離騷「心猶豫而狐疑兮，欲自適而不可」。

- (79) 【鴻微】 謝莊「爲八座江夏王請封禪表」(『宋書』禮志)「高祖武皇帝明竝日月，光振八區，拯已溺之晉，濟橫流之世，撥亂寧民，應天受命，鴻微洽于海表，威稜震乎沙外」。

- (80) 【鴻微未遠】 沈約「奏彈王源」(『文選』卷四〇)「若夫盛德之

胤，世業可懷，樂卻之家，前微未遠」。

- (81) 【靈緒】『廣弘明集』卷二八，燕天子慕容垂書「帝敬問太山朗和上。澄神靈緒，慈蔭百國。凡在含生孰不蒙潤」（大正五二・三二二中）。

- (82) 【引咎責躬】『後漢紀』安帝，建光元年五月，陳忠上書「陛下崇寬厚之德，推宋景之誠，引咎責躬，咨訪群吏」。

- (83) 【導物】『老子』五八章「是以聖人方而不割，廉而不剌，直而不肆」，王弼注「以直導物，令去其僻，而不以直激拂於物也。所謂大直若屈也」。孫綽「喻道論」（『弘明集』卷三）「夫佛也者，體道者也。道也者，導物者也。應感順通，無爲而無不爲者也」（大正五二・一六中）。

- (84) 【喟然歎曰】『論語』子罕「顏淵喟然歎曰，仰之彌高，鑽之彌堅。瞻之在前，忽焉在後。夫子循循然善誘人，博我以文，約我以禮。欲罷不能。既竭吾才，如有所立卓爾。雖欲從之，末由也已」。

- (85) 【摩那埵】 *Skt. mānava, P. mānatta* (後秦) 鳩摩羅什等譯『十誦律』卷四七「釋迦牟尼佛多陀阿伽度、阿羅呵、三藐三佛陀、知者、見者，爲比丘尼說半月八敬法。何等八。一者，百歲比丘尼，見新受具戒比丘，應一心謙敬禮足。二者，比丘尼應從比丘僧乞受具戒。三者，若比丘尼犯僧殘罪，應從二部僧乞，半月摩那埵法。…」(大正二三・三四五下)。失譯『毘尼母經』卷二「云何名爲摩那埵。摩那埵者，別住苦役與前住無異，但與日限少有異耳。若犯時即發露者，亦六日六夜行之。摩那埵者〈秦言意喜〉，前唯自意歡喜，亦生慚愧，亦使衆僧歡喜。由前喜故，與其少日，因少日故，始得喜名。衆僧喜者，觀此人所行法不復還犯，衆僧歎者言，「此人因此改悔，更不起煩惱，成清淨人也」。

是故喜耳」(大正二四・八一一中)。「翻梵語」卷三「摩那埵，舊譯曰齊量。持律者云，折伏下意，亦云治僧殘罪。聲論者云，正外國音，應言摩捺埵。摩捺，翻爲慢，埵，翻爲除。謂除慢。案，折伏下意，除慢法，治僧殘罪，是說對名，亦非正翻譯」(大正五四・一〇七上)。

- (86) 【三部】(東晉) 僧伽提婆譯『中阿含經』卷四七「信族姓男、族姓女，世尊般涅槃後不久施二部衆。施比丘衆、施比丘尼衆」(大正一・七二上)。

- (87) 【動靜】『易』艮「時止則止，時行則行。動靜不失其時，其道光明」。孔穎達疏「凡物之動息自各有時運。用止之法不可爲常，必須應時行止，然後其道乃得光明也」。

- (88) 【慚愧】『漢書』貢禹傳「自念終止以報厚德，日夜慚愧而已」。南本『大般涅槃經』卷一七「智者有二。一者，不造諸惡，二者，作已懺悔。愚者亦二。一者，作罪。二者，覆藏。雖先作惡，後能發露，悔已慚愧，更不敢作。猶如濁水置之明珠，以珠威力，水即爲清。如烟雲除，月則清明。作惡能悔，亦復如是。王若懺悔，懷慚愧者，罪即除滅，清淨如本」(大正二二・七二〇下)。

- (89) 【咨嗟】『楚辭』天問「何親揆發足，周之命以咨嗟」。王逸注「咨嗟，歎而美之也」。

- (90) 【普懺】『參考』(北宋) 知禮『四明尊者教行錄』修懺要旨「次運普懺之心，用成曠濟之道。若不然者，豈但不成大道，抑亦難滅衆愆」(大正四六・八六九上)。

- (91) 【子遺】『詩』大雅雲漢「周餘黎民，靡有子遺」。毛傳「孑然遺失也」。

- (92) 【南園】不明であるが，後出の「青園諸尼及諸寺」や「清淨水香復如前，不異青園」という記述から，南園は青園寺と別の

寺でなく、青園寺内にあった可能性が考えられる。

- (93) 『數弘戒品』 『三國志』 魏志、高柔傳「陛下臨政、允迪叡哲、數弘大猷、光濟先軌」。竺佛念譯『出曜經』卷九「戒定慧解者、彼修行人、戒品、定品、慧品三業具足、以自纓絡、摧結使聚、何往不壞」(大正四・六五六下)。

- (94) 『大教』 習鑿齒『與釋道安書』(弘明集 卷一二)「且夫自大教、東流四百餘年矣」(大正五二・七六下)。

- (95) 『憲軌』 『宋書』王弘傳「案世子左衛率康樂縣公謝靈運過蒙恩獎、頻叨榮授、聞禮知禁、爲日已久。而不能防閑闡闡、致茲紛穢、罔顧憲軌、忿殺自由。此而勿治、典刑將替」。

- (96) 『高牀』 『十誦律』卷六一「佛言、從今日聽白衣舍大牀、高牀、比丘不得畜、不得坐、不得臥」(大正三三・四六一上)。

- (97) 『俗服』 『十誦律』卷三八「佛在王舍城、爾時六群比丘著俗衣、諸居士呵責言、『沙門釋子自言『善好有德』。著俗衣、與白衣何異』。是事白佛、佛言、『從今不得著俗衣。犯者、突吉羅』」(大正三三・二七五上)。「摩訶僧祇律」卷四〇「佛住舍衛城、爾時須提那死、婦出家、其叔常欲使罷道。時比丘尼入聚落乞食、叔遇見之即欲捉取、便走入一大家內、語婦人言、『異事、幾當壞我梵行』。問、『何故』。答言、『叔欲罷我道』。婦人言、『莫恐、我當相護』。比丘尼言、『我欲向和上邊去』。婦人言、『汝欲去者、當著俗服、假異標相、乃可得脫』。即著臂釧耳環俗人服飾、又將四五人侍從而去。其叔於外見之念言、『此非比丘尼、是俗人耳』。到住處已、諸比丘尼呵言、『汝何故著此』。答言、『我叔欲取我、方便自護故假著此耳』。諸比丘尼語大愛道、大愛道即以是事具白世尊。佛言、『呼比丘尼來』。來已、佛問、『汝實爾不』。答言、『實爾』。佛言、『汝云何壞威儀。從今已後、不聽壞威儀。若決

定壞威儀者、非比丘尼。若方便自護故壞威儀、越比尼罪。故名比丘尼。若比丘尼決定壞威儀者、偷蘭遮。若方便、自護無罪」(大正三三・五四七上)。

- (98) 『約語』 『後漢書』袁閎傳「潛身十八年、黃巾賊起、攻沒郡縣、百姓驚散、閎誦經不移。賊相約語、不入其閭、卿人就閭避難、皆得全免」。『南齊書』蕭子懋傳「初、子懋鎮雍、世祖勅以邊略曰、…竝約語諸州、當其堺皆爾、不如法、即問事」。

- (99) 『制勒』 『宋書』王藻傳「制勒甚於僕隸、防閑過於婢妾」。

- (100) 『祇承』 『尚書』大禹謨「文命敷于四海、祇承于帝」。孔穎達疏「祇訓敬也。禹承堯舜二帝、故云敬承堯舜」。

- (101) 『律藏』 僧祐『新集律來漢地四部序錄』(『出三藏記集』卷三)「至于中夏聞法、亦先經而後律。律藏稍廣、始自晉末、而迦葉維部猶未東被。既總集五家、故存其名錄」(大正五五・二〇上)。

- (102) 『更始』 『禮記』月令「是月也、日窮于次、月窮于紀、星回于天。數將幾終、歲且更始」。

- (103) 『三藏法師』 『比丘尼傳』淨秀尼傳は「宋元嘉七年外國沙門求那跋摩至都、律範清高、秀更從受戒」(大正五〇・九四五中)とあるようにこの三藏法師を求那跋摩とするが、求那跋摩は元嘉八年(四三二)に遷化しているので適當ではない。もう一人の三藏法師である僧伽跋摩も比丘尼に授戒したが、元嘉十九年(四四二)に西域商人の船で外國に歸っており、淨秀の生年(四一八頃)から考えると適當ではない。可能性のあるのは寶意(阿那摩低)。「高僧傳」卷三、求那跋陀羅傳付寶意傳「時又有沙門寶意、梵言阿那摩低、本姓康、康居人、世居天竺。以宋孝建中(四五四・四五六)、來止京師瓦官禪房。恒於寺中樹下坐禪、又曉經律。時人亦號三藏。…齊文惠、文宣、及梁太祖竝敬以師

禮焉。永明（四八三～四九三）末年終於所住」（大正五〇・三四五上）。

(104) 「遷背」〔晉成帝哀策文〕（藝文類聚）卷二三「大業未究，神爽遷背。哀貫三靈，痛流萬代」。

(105) 「宴默」（後秦）鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』卷一，序品「又見菩薩，寂然宴默，天龍恭敬，不以爲喜」（大正九・三上）。〔參考〕（唐）栖復『法華經玄贊要集』卷一三「經云『又見菩薩』者，捨樂人。『寂然宴默』者，捨樂相。身心不動，名『寂然』。口不動，名『宴默』。或心不動，名『宴』。語不動，名『默』」（續藏一・五四・一・一二表上）。『大唐西域記』卷八「佛在樹下結跏趺坐，寂然宴默，受解脫樂，過七日後，方從定起」（大正五一・九一七下）。

(106) 「修儀」〔宋書〕卷四一、后妃傳「晉武帝採漢魏之制，置貴嬪、夫人、貴人，是爲三夫人，位視三公。淑妃、淑媛、淑儀、修華、修容、修儀、婕妤、容華、充華，是爲九嬪，位視九卿。其餘有美人、才人、中才人，爵視千石以下。高祖受命，省二才人，其餘仍用晉制。…世祖孝建三年（四五六），…又置昭儀、昭容、昭華，以代修華、修儀、修容」。

(107) 「故黃修儀及南昌公主」黃修儀・南昌公主とも不明。『建康實錄』では，王修儀が精舍を建て，新蔡公主が佛殿を建てたとする。神蔡公主は劉宋の文帝の第十女，劉英媚。何適に嫁いだ，前廢帝により死んだことにされ，後宮に入れられる。（唐）許嵩『建康實錄』卷一七、天監十八年（五一九）「置惠日寺。（原注）案西南去縣二里阮翻捨宅造之。在建西尉定陰里。舊說云，大同八年（五四二）丹陽尹王齡造。今在縣東二里。考其二跡不同。此惠日寺是宋之禪林寺。王修儀爲尼淨秀，立精舍，新蔡公

主爲佛殿。泰始三年（四六七）明帝助修，號曰禪林。濟惠文起房。如此之狀歷歷明矣。隋末亂離，竝從毀壞。唐初，杜伏威與輔公祐等，共修殿內丈六金像并左右侍者。始武德四年（六二二）止六年正月十五畢功。寺西廢禪林寺亦併入禪林之域。其年公祐背叛，七年李孝恭來討，爲軍火所及。貞觀七年（六三三）始移，加惠日之名於此矣。『宋書』卷四一、后妃前廢帝何皇后付何適傳「（何瑀）子邁，尙太祖第十女新蔡公主，諱英媚。『宋書』劉子勛傳「時廢帝狂凶，多所誅害。前撫軍諮議參軍何邁少好武，頗招集才力之士。邁先尙太祖女新蔡公主，帝許云主薨，殺宮人代之，顯加殯葬，而納主於後宮。深忌邁，邁慮禍及，謀因帝出行爲變，迎立子勛。事泄，帝自率宿衛兵誅邁，使八座奏子勛與邁通謀」。

(108) 「精舍」（梁）僧祐『釋迦譜』卷三「祐案，息心（息心は沙門の意）所棲，是曰精舍。竹林祇樹，爰始基構。遺風餘製，扇被于今」（大正五〇・六六中）。〔參考〕（北宋）法雲『翻譯名義集』卷七「或名精舍者，『釋迦譜』云，息心所栖，故曰精舍。靈裕『寺誥』曰，非僞暴者所居，故云精舍。『藝文類』云，非由其舍精妙，良由精練行者所居也」（大正五四・一二六七上）。

(109) 「麻衣」〔詩〕曹風，蜉蝣「蜉蝣掘閱，麻衣如雪」。鄭玄箋「麻衣，深衣。諸侯之朝，朝服，朝夕則深衣也」。『禮記』閒傳「又期而大祥，素縞麻衣」。鄭玄注「謂之麻者，純用布，無采飾也」。南本『大般涅槃經』卷一五「衣籠麻衣，塚間所棄，糞掃毳褐，欽婆羅衣，鼈鹿皮革，芻草衣裳」（大正二・七〇四中）。『高僧傳』卷一〇，史宗傳「史宗者，不知何許人。常著麻衣，或重之爲納，故世號麻衣道士」（大正五〇・三九〇上）。

(110) 「糞食」孔稚珪「薦杜京產表」（『南齊書』卷五九）「麻衣糞食

二十餘載，雖古之志士，何以加之。」沈約「與約法師書」（廣弘明集）卷二八「此生篤信精深，甘此糞食」（大正五二·三二六中）。劉向「說苑」善說「肉食者已慮之矣，糞食者尚何與焉」。『後漢書』劉陶傳「糞食之人，謬延逮久」。

(111) 「泥瓦」【參考】『破邪論』（廣弘明集）卷一一「奕云。西域胡者，惡泥而生。便事泥瓦」（大正五二·一六三中）。

(112) 「盡勤夙夜」【書】旅獒「夙夜罔或不勤」。『詩』大雅，烝民「夙夜不怠」。『書』舜典「夙夜惟寅，直哉惟清」。『肇論』答劉遺民書「禪師於瓦官寺教習禪道。門徒數百，夙夜匪懈」（大正四五·一五五下）。慧覺等譯『賢愚經』卷一一「夙夜勤業」（大正四·四二三中）。

(113) 「禪林（寺）」【比丘尼傳】卷四，僧念尼傳「宋文、孝武二帝常加資給。齊永明中，移住禪林寺。禪範大隆，諸學者衆。司徒竟陵王四事供養。年九十，梁天監三年卒，葬秣陵縣中興里內」（大正五〇·九四五下）。『同』卷四，慧勝尼傳「以宋元嘉二十一年出家，時年十八，爲淨秀尼弟子，住禪林寺。具戒以後，講『法華經』（大正五〇·九四六下）。『同』卷四，僧述尼傳「及年十九，以宋元嘉二十四年，從禪林寺淨秀尼出家」（大正五〇·九四七中）。

(114) 「性好閑靜」『淮南子』本經「質真而素樸，閑靜而不躁」（東晉）佛跋陀羅譯『大方廣華嚴經』卷四五「樂寂滅法，遠離世間。常好閑靜，遊諸佛刹，無所染著」（大正九·六八五上）。

(115) 「冥感」『注維摩詰經』卷九「若有讀誦解釋其義。如說修行。則爲諸佛之所護念」。肇曰。行應於內。護念於外。理會冥感。自然之數耳」（大正三八·四一三下）。（南齊）求那毘地譯『百喻經』卷四「尋時金鼠變爲毒蛇，此人深思，寧爲毒蛇螫殺，要當懷去。

心至冥感，還化爲金」（大正四·五五六中）。『參考』『高僧傳』卷一一，竺曇猷傳「猷乃祈誠冥感」（大正五〇·三九六中）。『同』卷一一，玄高傳「忠誠冥感，多有靈異」（同三九七中）。『晉書』劉殷傳「劉殷至孝，冥感，兼才識超公，此人終當遠達」。

(116) 「有徵」『春秋左氏傳』昭公八年「君子之言，信而有徵，故怨遠於其身」。

(117) 「裝潢」【參考】道宣『量處輕重儀』「四擬寫經具（謂紙、墨、筆、硯、案机、枕，則治紙界，具裝潢帙軸等也）」（大正）。『續高僧傳』卷二八，法泰傳「乃精勤寫得『法華經』一部，數有靈瑞。欲將向益州莊演。泰至成都，裝潢以檀香爲軸，表帶及帙并函。將還本寺別處安置，夜夜有異香」（大正五〇·六八七上）。『唐六典』卷八「弘文館學士無員數。學生三十人。校書郎二人從九品上。典書二人。揚書手三人。筆匠二人。熟紙裝潢匠九人」。

(118) 「染成」【劉宋】求那跋陀羅譯『雜阿含經』卷三三「王因我故，施與衆僧絹及劫貝，我欲令大王染成其色，施與衆僧」（大正二·一七〇下）。『參考』『釋迦譜』卷五に同文（大正五〇·八一上）。未詳撰者『大般涅槃經集解』卷三「案，僧亮（約四〇〇～四六八頃）曰，貪生愛壽者，以佛滅爲苦。今明滅非作法。乃息僞反真也。五色之中，白是眞實自然之色，不可染成」（大正三七·三八八上）。

(119) 「自然」鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』卷一，序品「又見諸如來，自然成佛道」（大正九·四下）。佛跋陀羅譯『大方廣佛華嚴經』卷九「或於樹王下，自然成正覺」（大正九·四五四下）。『老子』第二十五章「人法地，地法天，天法道，道法自然」。『水經注』河水三「山石之上，自然有文，盡若虎馬之狀，粲然成著，類似

圖焉。

- (120) 「娑伽羅龍王」鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』卷一，序品「有八龍王。難陀龍王、跋難陀龍王、娑伽羅龍王、和脩吉龍王、德叉迦龍王、阿那婆達多龍王、摩那斯龍王、優鉢羅龍王等，各與若干百千眷屬俱」(大正九·二上)。佛跋陀羅譯『大方廣佛華嚴經』卷五七「爾時菩薩，從兜率天降神下時，與十佛刹微塵等菩薩俱。……如是菩薩眷屬圍遶，又與八萬諸龍王俱。娑伽羅龍王等及諸夜叉八部神等，恭敬供養」(大正九·七六四上)。

- (121) 「現迹」(梁)寶唱『經律異相』卷四「得道師宗一。託生王宮二。現迹成道三。阿難問葬法四。現般涅槃五。摩耶五衰相現六」(大正五三·一五上)。

- (122) 「彌日」『後漢書』文苑傳下，邊讓(章華臺賦)「登瑤臺以回望兮，冀彌日而消憂」。李賢注「彌，終也」。曹植「與吳季重書」(『文選』卷四二)「雖燕飲彌日，其于別遠會稀，猶不盡其勞積也」。『世說新語』文學「張遂詣劉：真長延之上坐，清言彌日，因留宿至曉」。

- (123) 「知識」『墨子』號令「其有知識兄弟欲見之，為召，勿令入里巷中」。岑仲勉注「知識，友人也」。『呂氏春秋』遇合「人有大舅者，其親戚、兄弟、妻妾、知識，無能與居者」。

- (124) 「瞻睹」『參考』(唐)慧琳『一切經音義』卷三五「瞻睹(章闕反。『文字典說』，瞻，望也。『說文』，臨視也。從目詹聲也。下當弩反。『說文』，睹，見也。或從見作覩。從目形聲)」(大正五四·五三九上)。

- (125) 「招納」『抱樸子』君道「高樓觀而下道德，廣苑囿而狹招納」。謝靈運「擬魏太子鄴中集詩，劉楨」(『文選』卷三〇)「廣川無逆流，招納廁群英」。

- (126) 「訓化」『後漢書』獨行傳，範式「高在阿里，正身厲行，街中子弟皆服其訓化」。(西晉)竺法護譯『普曜經』卷八「領三千大界，訓化諸群生」(大正三·五三五下)。「宋書」禮志「古之聖王，躬耕帝籍，以供郊廟之粢盛，且以訓化天下」。

- (127) 「獎率」『三國志』蜀志，諸葛亮傳「當獎率三軍，北定中原」。
- 「參考」慧琳『一切經音義』卷四八「獎化(又作獎同。子兩反。小尔雅云。獎，率勵也。又成也。助也)」(大正五四·六二六上)。

- (128) 「禪誦」(東晉)僧伽提婆譯『雜壹阿含經』卷三八「不堪任行禪法者，當修三上人法業。云何為三。所謂坐禪、誦經、佐勸衆事」(大正二·七五七中)。(北魏)楊街之『洛陽伽藍記』卷二「沙門之體，必須攝心守道，志在禪誦」(大正五一·一〇〇五中)。

- (129) 「聖僧」(東晉)佛跋陀羅譯『大方廣佛華嚴經』卷三九「於一切聖僧，不壞信」(大正九·六四六中)。「高僧傳」卷三，僧伽跋摩傳「慧觀等以跋摩妙解『雜心』，諷誦通利，先三藏雖譯未及繕寫，即以其年(四三三)九月，於長干寺招集學士，更請出焉。寶雲譯語，觀自筆受。考覈研校，一周乃訖。續出『摩得勒伽』『分別業報略』『勸發諸王要偈』及『請聖僧浴文』等」(大正五〇·三四二下)。

- (130) 「果食」『參考』(前秦)竺佛念譯『鼻奈耶』卷八「食有五種。一根食。根食者。藕盧蔔繫婆陀根小而甜。二葶食。葶食者。竿炙叔基酢莖諸所食菜。三為菓食。諸所食菓。四為華食。婆婆羅梨華波羅羅酸棗婆婆。五為果食。諸所食果蒲萄甘橘」(大正二四·八八七中)。(北涼)曇無讖譯『優婆塞戒經』卷二「或受草食、根食、葶食、菓食、果食、土食、風食」(大正二四·一〇四二下)。
- (131) 「異迹」『後漢書』章帝紀「政有異迹」。「高僧傳」卷一〇，曇始傳「釋曇始，關中人，自出家以後，多有異迹」(大正五〇·

三九二中。

- (132) 「虔請聖衆七日供養」(西晉)竺法護譯「密迹金剛力士會」(大寶積經)卷九。「是時轉輪聖王勇郡、中宮太子、眷屬萬民繞佛作禮、供養世尊及與聖衆、晝夜七日畢竟、還歸其宮」(大正一一・五二下)。

- (133) 「禮懺」僧祐「出三藏記集」卷一四、求那跋陀羅傳「跋陀：乃密誦呪經，懇到禮懺，俄而信風暴至密雲降雨。一舶蒙濟。其誠感如此」(大正五五・一〇五下)。(東晉)郗超「奉法要」(弘明集)卷二三「三自歸者，歸佛，歸十二部經，歸比丘僧。過去見在當來三世十方佛。三世十方經法。三世十方僧。每禮拜懺悔，皆當至心歸命，并慈念一切衆生，願令悉得度脫。外國音稱南無漢曰歸命。佛者漢音曰覺，僧者漢音曰衆」(大正五二・八六上)。

- (134) 「攝心運想」『比丘尼傳』卷三，智勝尼傳「永明中，作聖僧齋，攝心祈想，忽聞空中彈指，合掌側聽」(大正五〇・九四三上)。鳩摩羅什譯「妙法蓮華經」卷五，分別功德品「若坐若經行，除睡常攝心，以是因緣故，能生諸禪定」(大正九・四五上)。「參考」『慈悲道場懺法』卷一「然後運想入歸信門」(大正四五・九二三下)。

- (135) 「桑葢」『詩』衛風，氓「吁嗟鳩兮，無食桑葢」。朱熹集傳「甚，桑實也」。「參考」『晉書』張天錫傳「桑葢甜甜，鴟鴞革響」。

- (136) 「壞衣色」鳩摩羅什等譯「十誦律」卷一五「若比丘不以三種壞衣色，著新衣者，波逸提。…三種壞色者，若青、若泥、若茜。」(大正三三・一〇九中)。

- (137) 「倣效」倣效，倣效に同じ。(前漢)桓寬「鹽鐵論」未通「民相倣效，田地日蕪」。(後漢)王符「潜夫論」浮侈「邊遠下士，

亦競相倣效」。

- (138) 「閒色」『禮記』玉藻「衣正色，裳閒色」。疏「皇氏曰，正謂青、赤、黃、白、黑五方正色也，不正謂五方閒色也，綠、紅、紫、碧、駟黃是也」。「詩」邶風，綠衣「綠兮衣兮」。傳「綠衣黃裏興也，綠閒色，黃正色」。「荀子」正論「衣被則服五采，雜閒色。重文繡，加飾之以珠玉」。

- (139) 「五大之過」鳩摩羅什等譯「十誦律」卷五一「有五純色不應畜。純赤、純青、純鬱金色、純黃藍色、純曼提咤色。有五種大色不應畜。穹伽色、黔蛇色、盧耶那色、嵯梨多色、呵梨陀羅色」(大正三三・三七一上)。

- (140) 「有分」『莊子』齊物論「有倫，有義，有分，有辯」。

- (141) 「阿耨達池五百羅漢」失譯「菩薩本行經」卷上「昔佛在阿耨達池，告五百阿羅漢。汝等各各自說前世宿行今得成道」(大正三・一一二中)。「高僧傳」卷三，智猛傳「智猛」與餘四人共度雪山，渡辛頭河，至罽賓國。國有五百羅漢，常往返阿耨達池。有大德羅漢，見猛至歡喜」(大正五〇・三四三中)。

- (142) 「凡聖」沈約「神不滅論」(廣弘明集)卷二二「自凡及聖，含靈義等。但事有精麤，故人有凡聖」(大正五二・二五三下)。

- (143) 「無遮大會」『高僧傳』卷一，僧祐傳「凡獲信施，悉以治定林、建初，及修繕諸寺，并建無遮大集，捨身齋等。及造立經藏，搜校卷軸。使夫寺廟開廣，法言無墜，咸其力也」(大正五〇・四〇二下)。「梁書」武帝本紀「中大通元年…九月…癸巳，輿駕幸同泰寺，設四部無遮大會，因捨身，公卿以下，以錢一億萬奉贖」。無遮大會は，四部衆(出家と在家の男女)に對して無制限(無遮)に食事や物品を布施する大集會。開催年次を五年に一度とする五年大會と趣旨は同じだが，儀禮として異なる。

- (144) 「供設」『春秋繁露』天地之行「供、設、飲食，候視疾疾，所以致養也」。
- (145) 「罽賓國五百羅漢」(西晉)安法欽譯『阿育王傳』卷四「阿難心念言，『我諸賢聖弟子今當來至』。作是念已，五百羅漢自然來至」(大正五〇・一一六上)。同「龍問言欲得幾許地。答言欲得一坐處。摩田提即時現身滿罽賓國，跏趺而坐。龍問言用爾許地爲。答言我今有諸伴黨。即復問言有幾伴黨。答言有五百羅漢」(大正五〇・一一六下)。(西晉)法炬・法立共譯『法句譬喻經』卷二「昔佛在羅閱祇國。遣一羅漢名曰須漫，持佛髮爪，至罽賓南山中，作佛圖寺。五百羅漢常止其中，旦夕燒香，繞塔禮拜」(大正四・五九〇中)。
- (146) 「凡僧」僧祐『出三藏記集』卷一五，智嚴傳「於是步歸行至罽賓，無疾而卒。時年七十八。外國之法，得道僧無常與凡僧別葬一處」。(智)嚴雖苦行絕倫，而時衆未判其得道信不，欲葬凡僧之墓，抗舉嚴喪，永不肯起，又益人衆，不動如初。衆咸驚怪，試改向得道墓所。於是四人輿之，行駛如風，遂得空葬」(大正五・一一二下・一一三上)。
- (147) 「道人」前注36參照。
- (148) 「借問」『妙法蓮華經』卷二「借問貧里，欲往傭作」(大正九・一八上)。「宋書」王微傳「是以每見世人文賦書論，無所是非，不解處，即日借問，此其本心也」。
- (149) 「動靜」『六蹈』虎蹈，動靜「往視其動靜」。「同」龍蹈，兵徵「察其動靜言語」。「三國志」吳志，孫韶傳「先知動靜，而爲之備」。「易」艮「時止則止，時行則行。動靜不失其時，其道光明」。「抱樸子」行品「動靜無宜，出處莫可」。
- (150) 「宋林門」未詳。
- (151) 「逐視」『高僧傳』卷十，捷陀勒傳「捷陀勒者，本西域人，來至洛陽積年。衆雖敬其風操，而終莫能測。後謂衆僧曰，『洛東南有槃鴉山。山有古寺廟處，基墟猶存，可共修立』。衆未之信，試逐檢視。…入山到一處，四面平坦。勒示云，『此卽寺基也』。…」(大正五〇・三八八下)。
- (152) 「香湯」(東晉)佛跋陀羅譯『大方廣佛華嚴經』卷四九「善男子，十方衆生諸有病者，來詣我所，我悉能治。除其患已，沐浴香湯，香華瓔珞，名衣上服而莊嚴之，肴膳飲食而供養之，無量珍寶而惠施之。然後爲說種種法門」(大正九・七〇七下)。
- (153) 「雜物」(西晉)竺法護譯『正法華經』卷九，藥王菩薩品「雖用雜物供養於佛，不能暢盡至真之德」(大正九・一二五中)。「大般泥洹經」卷四「又說如來應供等正覺，在於祇樹給孤獨園。受畜錢財金銀寶物奴婢，象馬牛羊鷄狗猫狸豺鼠，銅鐵琉璃眞珠珂貝，金銀寶玉珊瑚琥珀，種種雜物，種種田宅，種種販賣，畜養男女積聚穀米，如此諸物哀愍世間故，皆悉受之」(大正二・八八〇中・下)。「易」繫辭下「雜物撰德，辨是與非」。孔穎達疏「雜聚天下之物，撰數衆人之德，辨定是之與非」。
- (154) 「寂默」(東晉)孫綽『游天臺山賦』(『文選』卷一一)「恣語樂以終日，等寂默於不言」。「大方廣佛華嚴經」卷九「寂默語言道平等無異觀」(大正九・四五三下)。
- (155) 「檣杓」『說文解字』卷六，木「檣。幹也。从木義聲。魚羈切」。
- (156) 「用水法」『參考』失譯『薩婆多毘尼毘婆沙』卷八「凡用水法，應取上好細疊縱廣一肘，作漉水囊」(大正二三・五五二中)。失譯『大比丘三千威儀』卷上「入浴室有二十五事。一者，當低頭入，不得上向。二者，當隨次踞，勿當日前。三者，不得讀經

狂語。四者，日達嚨，不得以水洗。五者，不得取日水用。六者，不得持水澆火。七者，不得呵火多少。八者，不得多人水。九者，不得於中浣手巾衣。十者，浴已即出去。十一者，和上、阿闍梨在中，不得入。十二者，三師浴，當入迴之。十三者，三師浴，當持衣住外待。十四者，已出易衣，當取浴布浣之。十五者，自入浴當報。十六者，入當著麻油。十七者，當用土。十八者，用澡豆。十九者，當用灰。二十者，當用湯已，乃用水。二十一者，當多少誦經。二十二者，當持水澡浴處。二十三，不得住上座前。二十四者，設無日當達嚨禮越主。二十五者，出，不得當風住急入室」（大正二四·九一八下）。

(157) 【搖動】『賢愚經』卷六「爾時天地。六反震動。諸天宮殿。搖動不安」（大正四·三九〇上）。『淮南子』精神訓「耳目淫於聲色之樂，則五藏搖動而不定矣。五藏搖動而不定，則血氣滔蕩而不休矣」。

(158) 【神異】『孔子家語』五帝德「玄枵之孫，喬極之子，曰高辛，生而神異，自言其名」。『後漢書』方術傳下，蒯子訓「有神異之道。嘗抱鄰家嬰兒，故失手墮地而死，其父母遂埋藏之。後月餘，子訓乃抱兒歸焉」。謝靈運「山居賦」（『宋書』卷六七）「表神異於緯牒，驗感應於慶靈」。「參考」『高僧傳』卷一〇，法獻傳「言終，忽然不見。舉寺驚嗟，咸歎神異」（大正五〇·四一一中）。『高僧傳』卷一三，興福篇，論「八王請分，還國起塔。及瓶灰二所，於是十刹興焉。其生處，得道、說法、涅槃，肉髻頂骨，四牙雙迹，鉢杖唾壺泥洹僧等，皆樹塔勒銘，標揭神異」（大正五〇·四一三上）。

(159) 【違和】（前漢）焦贛『易林』屯之泰「調攝違和，陰陽顛倒」。『宋書』裴松之傳「懼國俗陵積，民風凋僞，胥厲違和，水旱傷

業」。『參考』『南史』卷七三，劉渢傳「暢曰，公去歲違和，今欲發動，顧左右，急呼師視脉」。

(160) 【極篤】『參考』『比丘尼傳』卷二，法盛尼傳「塔下禮佛，晚因遇疾，稍就綿篤」（大正五〇·九三七下）。『高僧傳』卷五，慧虔傳「當時疾雖綿篤，而神色平平有如恒日」（大正五〇·三三七下）。『同』卷六，慧永傳「以晉義熙十年遇疾綿篤，而專謹戒律執志愈動」（大正五〇·三六二中）。『同』卷一，竺僧顯傳「後遇疾綿篤，乃屬想西方，心甚苦至，見無量壽佛降以眞容，光照其身，所苦都愈」（大正五〇·三九五中）。

(161) 【浩然無礙】『孟子』公孫丑「吾善養吾浩然之氣」。『管子』內業「精存自生，其外安榮，內藏以爲泉原。浩然和平，以爲氣淵」。『淮南子』要略「誠通其志，浩然可以大觀矣」。『肇論』九折十演，通古「窮本極末，莫之與二，浩然大均，乃曰涅槃」（大正四五·一六一上）。宗炳「明佛論」（『弘明集』卷二）「今以神明之君遊浩然之世」（大正五二·一二中）。鳩摩羅什譯『維摩詰所說經』卷上「心常安住，無礙解脫」（大正一四·五三七上）。對應箇所『注維摩詰經』卷一「（僧）肇曰，此解脫七住所得。得此解脫，則於諸法通達無閼，故心常安住」（大正三八·三二九上）。

(162) 【欣爾獨笑】『參考』（東晉）僧伽提婆譯『中阿含經』卷一二「爾時世尊與大比丘衆俱行道，中路欣然而笑。尊者阿難見世尊笑，又手向佛白曰，「世尊，何因緣笑。諸佛如來無所著等正覺。若無因緣，終不妄笑。願聞其意」。……」（大正一一·四九九上）。

(163) 【危困】（東晉）佛跋跋陀羅譯『大方廣佛華嚴經』卷五四「大王，我等今者大苦大苦」（飢渴寒凍疾病危困，無所歸依，無救濟者，如在牢獄」（大正九·七四三上）。『後漢書』臧洪傳「明府之於袁氏，本無怨隙，今爲郡將之故，自致危困」。

- (164) 「寶塔」鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』卷四，見寶塔品「爾時佛前有七寶塔。高五百由旬，縱廣二百五十由旬。從地踊出住在空中。……三十三天雨天曼陀羅華，供養寶塔。餘諸天龍夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等千萬億衆，以一切華香瓔珞幡蓋伎樂，供養寶塔恭敬尊重讚歎。……爾時有菩薩摩訶薩。名大樂說。知一切世間天人阿修羅等心之所疑。而白佛言。世尊。以何因緣有此寶塔從地踊出」(大正九·三二中下)。
- (165) 「幡花伎樂」『出三藏記集』卷一四，求那跋摩傳「會葬萬餘人。妓樂幡花四面雲集」(大正五五·一〇四下)。『孔子家語』辯政「五官伎樂，不解於時」。『後漢書』百官志二「太子樂令一人，六百石」，本注「掌伎樂」。
- (166) 「疾恙」『參考』(梁)劉之遴「與震兄李敬肅書」(『廣弘明集』卷二四)「生滅無常。賢弟震法師。奄同力士生處道識。長往法言永絕。惋怛。抽摧不能已已年事。未高德業方播疾恙。甫爾謂無過憂。遂至遷化道俗驚愕」(大正五二·二七五下)。僧祐「薩婆多部記目錄序」(『出三藏記集』卷一二)「條序餘部，則委之明勝。疾恙惛漠，則辭之銓藻。儻有覽者，略文取心」(大正五五·八九上)。
- (167) 「豁然」陶潛「桃花源記」(『陶淵明文集』卷六)「復行數十步，豁然開朗」。「三國志」吳志，甘寧傳「聞母言，豁然即意釋」。(劉宋)曇摩蜜多譯「觀普賢菩薩行法經」「豁然大悟，得旋陀羅尼，百千萬億諸陀羅尼門」(大正九·三九一中)。(劉宋)畺良耶舍譯「觀無量壽佛經」「豁然大悟，得無生忍」(大正一二·三四六中)。「顏氏家訓」勉學「積年凝滯，豁然霧解」。
- (168) 「綿悒」『世說新語』德行「劉尹在郡，臨終綿悒，聞閣下祠神鼓舞，正色曰，莫得淫祀」。
- (169) 「東向視」東を向くことと信仰する佛の關係は定かでない。
- (170) 「香火」『晉書』單道開傳「陳郡袁宏爲南海太守，與弟穎叔及沙門支法防共登羅浮山，至石室口，見道開形骸如生，香火瓦器猶存」。
- (171) 「移時」『後漢書』吳祐傳「祐越壇共小史雍丘、黃眞歡語移時，與結友而別」。
- (172) 「及與」(後秦)佛陀耶舍·竺佛念共譯「長阿含經」卷一四「而此善念梵志及其弟子梵摩達隨逐如來及比丘僧。而善念梵志以無數方便毀謗佛法及與衆僧。弟子梵摩達以無數方便稱讚如來及法衆僧」(大正一·八八中)。
- (173) 「舍利弗」「目連」『長阿含經』卷一「今我二弟子。一名舍利弗。二名目連。諸弟子中最爲第一」(大正一·三上)。
- (174) 「聖人」南本『大般涅槃經』卷一一「以何等故名佛菩薩爲聖人耶。如是等人有聖法故」(大正一二·六七五中)。
- (175) 「須臾」『荀子』勸學「吾嘗終日而思矣，不如須臾之所學也」。
- (176) 「翹頭末城」鳩摩羅什譯「彌勒下生成佛經」「爾時彌勒佛於華林園。其園縱廣一百由旬，大衆滿中。初會說法，九十六億人得阿羅漢。第二大會說法，九十四億人得阿羅漢。第三大會說法，九十二億人得阿羅漢。彌勒佛既轉法輪，度天人已，將諸弟子入城乞食。無量淨居天衆恭敬，從佛入翹頭末城，當入城時，現種種神力，無量變現。(大正一四·四二五上)中，「是時有一大城名翹頭末，長十二由旬廣七由旬，端嚴殊妙，莊嚴清淨。福德之人充滿其中，以福德人故豐樂安隱。其城七寶上有樓閣，戶牖軒窓皆是衆寶覆其上。街巷道陌廣十二里，掃灑清淨。有大龍王名曰多羅尸棄。其池近城龍王宮殿」(大正一四·四二三下)，「翹頭末城，衆寶羅網，彌覆其上，寶鈴莊嚴，微風吹動，其聲和雅，

如扣鐘磬」(大正一四・四二四上)。失譯『彌勒來時經』「有城名鷄頭末、鷄頭末城、者當王國治、城周匝四百八十里、以土築城、復以板著城、復以金銀琉璃水精珍寶著城」(大正一四・四三四下)。(177)「三臺」往生と臺とが繋がる經典としては西方淨土を説くとして、『觀無量壽佛經』に以下のようにある。(劉宋) 璽良耶舍譯『觀無量壽佛經』「上品上生者、…生彼國時。此人精進勇猛故。阿彌陀如來與觀世音及大勢至無數化佛百千比丘、聲聞大衆、無量諸天。七寶宮殿。觀世音菩薩執金剛臺、與大勢至菩薩至行者前。阿彌陀佛放大光明、照行者身、與諸菩薩授手迎接。觀世音、大勢至與無數菩薩讚歎行者、勸進其心。行者見已、歡喜踊躍、自見其身乘金剛臺、隨從佛後、如彈指頃往生」(大正二・三四四下)。「同」「上品中生者、…行此行者命欲終時、阿彌陀佛與觀世音及大勢至、無量大衆、眷屬圍繞、持紫金臺、至行者前、讚言、『法子、汝行大乘解第一義、是故我今來迎接汝』、與千化佛一時授手、行者自見坐紫金臺、合掌叉手、讚歎諸佛、如一念頃、即生彼國七寶池中。此紫金臺如大寶花、經宿即開。行者身作紫磨金色、足下亦有七寶蓮華」。(大正二・三四五上)。「同」「中品上生者、…行者見已、心大歡喜、自見已身坐蓮花臺」(大正二・三四五中)。このように『觀無量壽佛經』は往生者の機根の優劣に應じて金剛臺・紫金臺・蓮花臺の三種の臺で來迎すること説くが、これは彌勒と直接關係しない。淨秀尼が彌勒佛の名に言及すること、西方でなく東向して合掌することは西方淨土の敎えと合わないため、本行狀に現れる三臺は『觀無量壽佛經』を素材とするのではあるまい。しかし臺を手にして來迎に訪れる様子は、間接的にせよ、『觀無量壽佛經』の描寫と何らかの繋がりがあるのではないか。

(178)「有人持幡華伎樂及三臺來迎於此」(劉宋) 沮渠京聲譯『觀彌勒菩薩上生兜率天經』「未來世中諸衆生等聞是菩薩大悲名稱、造立形像、香花衣服、繪蓋幢幡、禮拜繫念、此人命欲終時、彌勒菩薩放眉間白毫大人相光、與諸天子雨曼陀羅花、來迎此人。此人須臾即得往生、值遇彌勒、頭面禮敬、未舉頭頃、便得聞法、即於無上道得不退轉、於未來世得值恒河沙等諸佛如來」(大正一四・四二〇中)。このような兜率天からの來迎に『觀無量壽佛經』の三臺(前注177參照)が關係付けられているものと推測しておきたい。

(179)「半路」『世說新語』任誕「孫承公狂士、每至一處、賞翫臬日、或回至半路卻返」。

(180)「爾時已作兩臺。爲此兆故、即更作一臺也」意味を解せなかった。和譯は暫定譯に過ぎない。

(181)「兩樹寶華」(北涼) 曇無讖譯『大集經』卷四七「爾時於中羅睺羅阿修羅王及與眷屬、如是色相以大莊嚴、五音伎樂一時俱作、歌舞戲笑、音聲和合、而詣佛所。復以兩手持種種寶華、天鬘、塗香、向佛方所、遙散奉獻」(大正二三・三一九下、三二〇上)。

(182)「瑞相」沈約『華陽先生難』(廣弘明集)卷五「瑞相又有日月星辰、停住不行」(大正五二・二二二下)。

(183)「涼風」『淮南子』墜形訓「縣圃、涼風、樊桐、在崑崙閭闔之中」。「水經注」河水一「崑崙之丘、或上倍之、是謂涼風之山、登之而不死」。南本『大般涅槃經』卷一四「時有涼風吹香山中種種香、藥滿其眼眶。尋還得眼、如本不異。諸賊開眼、即見如來住立其前而爲說法。賊聞法已、發阿耨多羅三藐三菩提心」(大正一一・七〇〇下)。

(184)「妙藥」『雲笈七籤』卷二二、東方呵羅提國「一名養神芝、

其葉似菰，生不叢株，食之飛行上清。已死之人，覆之則生，神奇妙藥，入其國宜知其名，存胡老仙官採之於祖洲，思其色而服之，三年，面有流光，延壽萬年。

- (185) 「異香」『後漢書』賈琮傳「舊交趾土多珍產。明璣、翠羽、犀、象、玳瑁、異香、美木之屬，莫不自出」。『續高僧傳』卷六，慧約傳「今夜當去，至五更二唱異香滿室左右肅然」（大正五〇・四六九下）。『雲笈七籤』卷五「梁茅山貞白陶先生」「顏色不變，屈伸如常。屋中香氣，積日不散」。

- (186) 「以漸」『後漢書』丁鴻傳「若勅政責躬，杜漸防萌，則凶妖銷滅，害除福湊矣」。

- (187) 「豁然」前注一六七參照。

- (188) 「圍遶」『參考』『無量義經』「菩薩摩訶薩八萬人、…國王、王子、國臣、國民、國士、國女、國大長者，各與眷屬百千萬數而自圍遶，來詣佛所，頭面禮足，遶百千匝，燒香散華種種供養，供養佛已，退一面坐」（大正九・三八四上・中）。

- (189) 「開眼」南本『大般涅槃經』卷一四「時有涼風吹香山中種種香藥滿其眼眶。尋還得眼，如本不異。諸賊開眼，即見如來住立其前而爲說法。賊聞法已，發阿耨多羅三藐三菩提心」（大正一二・七〇〇下）。

- (190) 「幡蓋」『南齊書』高帝紀上「至是又上表禁民間華僞雜物。不得以金銀爲箔，…不得用紅色爲幡蓋衣服」。

- (191) 「天監五年六月十七日」『比丘尼傳』淨秀尼傳「五年六月十七日苦心悶不復飲食。彭城寺慧令法師六月十九日夢見一柱殿嚴麗非常，謂是兜率天宮。見淨秀在其中。令即囑之。得生好處勿忘將接。秀曰，法師兄是大丈夫。弘通經教自應居勝地。令聞秀病往看之述夢中事」（大正五〇・五四五中・下）。

- (192) 「小品」用例未見。未詳。

- (193) 「檀越」道世『法苑珠林』卷四五「晉大司馬桓溫，字元子，末年忽有一比丘尼，失其名，來自遠方，投溫爲檀越」。沈約「南齊禪林寺尼淨秀行狀」（『廣弘明集』卷三）「及至就講，乃得七十檀越，設供果，食皆精」（大正五二・二七〇下）。

- (194) 「勝地」『管子』七法「成功立事，必順於禮義，故不禮不勝天下，不義不勝人。故賢知之君，必立於勝地」。

- (195) 原文を「法師又云，『不如此也。雖爲丈夫，不能精進，持戒不及』。上時體已轉惡」と解した。會讀では「法師又云，『不如此也。雖爲丈夫，不能精進，持戒不及上』。時體已轉惡」と解すべき案も示された。

- (196) 「體已轉惡」『世說新語』容止「裴令公有僞容姿，一旦有疾至困，惠帝使王夷甫往看。王出，語人曰，『體中故小惡』」。

- (197) 「素疏」（西晉）竺法護譯『阿闍貫王女阿術達菩薩經』「…摩訶迦葉報女，『云何自知身行善』。女答言，『聞法觀善，身行善，則見善造行』。摩訶迦葉報女，『云何菩薩自觀身行善』。女答摩訶迦葉，『菩薩法與一切天下人共合適不疏遠。是則菩薩身行善』」（大正二二・八七上）。『晉書』紀瞻傳「紀瞻字思遠，丹楊秣陵人也。…瞻性靜默，少交遊，好讀書，或手自抄寫，凡所著述詩賦牋表數十篇。兼解音樂，殆盡其妙。厚自奉養，立宅於烏衣巷，館宇崇麗，園池竹木，有足賞翫焉。慎行愛士，老而彌篤。尚書閔鴻、太常薛兼、廣川太守河南褚沈、給事中宣城章達、歷陽太守沛國武嘏，並與瞻素疏，咸藉其高義，臨終託後於瞻。瞻悉營護其家，爲起居宅，同於骨肉焉」。『南史』王鎮之傳付王晏傳「晏字休默，一字士彥。仕宋，初爲建安國左常侍，稍至車騎，晉熙王燮安西板晏主簿，時齊武帝爲長史，與晏相遇。…晏

人望未重，又與上素疏，中興（501～502）初，雖以事計委任，而內相疑阻，晏無防意。

- (198) 「不堪相見」『孟子』離婁下「顏子當亂世，居於陋巷，一簞食，一瓢飲，人不堪其憂，顏子不改其樂」。『高僧傳』卷一三，法願傳「永明二年（四八四）願遭兄喪，啓乞還鄉。至鄉少時，敕旨重疊。願後出，憩在湘宮（寺）。鑾駕自幸，降寺省慰。願云，「脚疾未消，不堪相見」。帝乃轉蹕而去」（大正五〇・四一七中）。

- (199) 「爲治無益」『經律異相』卷七「淨飯王遇疾，支節欲解，喘如駛流，衆治無益。二弟、諸王、群臣等曰，「大王素不作惡，種德無厭，養使一切無不得安，何故愁惱」。王曰，「恨不見悉達及難陀、阿難陀、羅睺等，除我貪姪，淚下如雨」。…」（大正五三・三三三中）

- (200) 「漸就綿憊」『宋書』陶潛傳「疾患以來，漸就衰損，親舊不遺，每以藥石見救，自恐大分將有限也」。『太平御覽』工藝六「書斷」曰，秦李斯妙六篆，始省改之爲小篆，著『蒼頡篇』七章。雖帝王質文，世有損益，終以文代質，漸就澆醜。綿憊，既出「亦殊綿憊」語注を見よ。

- (201) 「至七月十二日」『比丘尼傳』淨秀尼傳は「至七月十三日」。

- (202) 「天雨涼」宋玉『高唐賦』（『藝文類聚』卷七九）「遇天雨之新霽兮，觀百谷之俱集」。『參考』（隋）闍那崛多『佛本行集經』卷八「樹木藥草，依時開華。虛空諸天，持白盞拂，搖童子上，虛空雷聲。微細天雨，涼風四來，不見其形，梵響樂音」（大正三・六八九中）。

- (203) 「悶勢」既出「六月十七日，得病，苦心悶，不下飲」を受け。〔北涼〕浮陀跋摩・道泰共譯『阿毘曇毘婆沙論』卷四十

「復次，以愛是過去、未來、現在苦因根本出處，起處因故。復次，以愛數數生苦勢用勝故」（大正二八・三〇〇下）。

- (204) 「如小退」『比丘尼傳』淨秀尼傳は「小聞」（麗再）／「少聞」（思溪等）。

- (205) 「自云，夢見迎來，至佛殿西頭」『比丘尼傳』淨秀尼傳は「自夢見幡蓋、樂器在佛殿西」。

- (206) 「人人」『禮記』表記「子曰，仁之難成久矣。人人失其所好，故仁者之過易辭也」。『孟子』離婁上「人人親其親，長其長，而天下太平」。

- (207) 「幡竿」『宋書』武帝紀上「大軍至左里，將戰，公所執麾竿折，折幡沈水，衆竝怪懼。公歡笑曰，「往年覆舟之戰，幡竿亦折，今者復然，賊必破矣」。

- (208) 「猶車在地」用例未詳。

- (209) 「幡之爲理」『大般涅槃經集解』卷四「僧宗（四三八～四九六）曰，：食之爲理，消入百脈，於身成用。及其用時，即見佛性。無復煩惱所以等也」（大正三七・三九三中）。

- (210) 「不異世間軍隊擔鼓旗幡也」『參考』『通典』樂四，土三「擔鼓如小甕，先冒以革而漆之。『隋書』音樂志下、隋二、皇后房內歌辭「西涼者，起苻氏之末，呂光、沮渠蒙遜等，據有涼州，變龜茲聲爲之，號爲秦漢伎。：其歌曲有永世樂，解曲有萬世豐，舞曲有于闐佛曲。其樂器有鍾、磬、彈箏、羯鼓、臥箏篥、豎箏、篥、琵琶、五絃、笙、簫、大篳篥、長笛、小篳篥、橫笛、腰鼓、齊鼓、擔鼓、銅拔、貝等十九種，爲一部。工二十七人」。

旗幡＝旗旛。『吳子』應變「武侯問曰，「車堅馬良，將勇兵強，卒遇敵人，亂而失行，則如之何」。〔吳〕起對曰，「凡戰之法，畫以旌旗，麾爲節，夜以金鼓，笛爲節。麾左而左，麾右而右。

鼓之則進，金之則止。二吹而行，再吹而聚，不從令者誅。三軍服威，士卒用命，則戰無彊敵，攻無堅陳矣」。「參考」(北宋)知禮『金光明經文句記』卷四下「二、『擊大』下，明擊鼓誡進者，軍陣之法也。兵權曰，聞鼓則進，聞金則止。鼓則嚴肅軍衆使前驅也，督率也，率導引也。…」(大正三九・一三七上)。

(211) 「便絕，不復…」僧伽提婆譯『中阿含經』卷一四「太子，若此國中傳授法絕，不復續者，是名人民墮在極邊」(大正一・五一三下)。

(212) 「令請相識衆僧設會，意似分別」『禮記』曾子問「相識有喪服可以與於祭乎」。沈約「述僧、設會論」(『廣弘明集』卷二四)「夫修營法事，必有其理。今世召請衆僧，止設一會。當由佛在世時，常受人請，以此擬像故也」(大正五二・二七三中)。「比丘尼傳」淨秀尼傳は「二十二日，請相識僧會別」。すなわち「僧」は行狀の「衆僧」に，「會」は「設會」に，「分」は「分別」に當たる。

(213) 「意似分別」曹丕『與朝歌令吳質書』「今果分別，各在一方」。陶潛『擬古九首』詩之三「自從分別來，門庭日荒蕪」。「高僧傳」卷一四，序錄「齊竟陵文宣王(蕭子良)『三寶記傳』，或稱『佛史』，或號『僧錄』，既三寶共敍，辭旨相關，混濫難求，更爲蕪昧。瑯琊王巾所撰『僧史』，意似該綜，而文體未足。沙門僧祐撰『三藏記』(『出三藏記集』)，止有三十餘僧，所無甚衆」(大正五〇・四一八下)。

(214) 「中後」(唐)道宣『法苑珠林』卷四二「又處處『經』云，佛言，中後，不食有其五福。一者少姪。二者少臥。三者得一心。四者無有下風。五者身得安隱，亦不作病。是故沙門知福不食」(大正五三・六一三上)。「目連問戒律中五百輕重事」(問，貧乏，

得入市乞不。答，中、前得。中、後不得。亦不得乞錢。若欲乞錢，當將一白衣，沙彌亦得」(大正二四・九八〇上)。

(215) 「泯然而臥」『參考』「神僧傳」卷四，慧思(五一五・五七七)傳「是年六月臨將終時，連日說法，苦切呵責。聞者寒心。至十二日，屏衆，泯然而逝」(大正五〇・九七六中)。

(216) 「作兩炊久」『參考』「金匱要略」腹滿寒疝宿食病脈證治「右三味，以水四升，煮取二升，去滓，內膠飴一升，微火煎取一升半，分溫再服。如一炊頃，可飲粥二升，後更服，當一日食糜，溫覆之」。「太平廣記」神仙、馮俊「俊如言騎石，道士以鞭鞭石，遂覺此石舉在空中而飛。時已向晚，如炊久，覺足躡地，開目，已在廣陵郭門矣」。

(217) 「動轉」『長阿含經』卷一一「爾時波梨子即報言，『當歸，當歸』。作是語已，於繩床上動轉其身。爾時繩床復著其足，彼乃不能自離繩床。況復行步，至世尊所」(大正一・六八下)。

(218) 「比丘尼傳」淨秀尼傳は，この語を述べた後すぐに尼は逝去し，享年八十九と記す。すなわち淨秀尼の生卒年は四一八・五〇六年である。しかし一方，本行狀はここで終了せず，その後も尼が存命し，天監五年(五〇六)八月に入ってから生きていた。しかし行狀は末尾を缺くため，卒した年月日は不明，享年も不明。ここに本行狀と『比丘尼傳』淨秀尼傳との違いがある。

(219) 「自然飽滿」(西晉)竺法護譯『申日經』「佛言，持毒飯來。我自食之。申日歡喜，即如佛教。分布飯具，皆悉周遍，便即受之，呪願達嚩。其毒飯者，變爲百味，香聞十方。其有聞此飯香氣者，自然飽滿，身得安隱，皆發無上平等道意」(大正一四・八一八下)。

(220) 「聞人間食皆臭」 竺法護譯『申日經』「其有聞此飯香氣者」。

『長阿含經』卷七「此閻浮利（閻浮提・ジャンプ・ドゥヴィーパ）地，臭穢不淨。諸天在上，去此百由旬，遙聞人臭，甚於廁溷」

（大正一・四三下）。竺佛念譯『出曜經』卷七「若我今日受天、上精氣，斷人間食者，則非其宜。是時菩薩便不受諸天所貢飲食精氣，菩薩勤苦，苦行已經六年，便自校計身中，我今氣力羸劣」（大正四・六四四中）。〔參考〕無性釋・（唐）玄奘譯『攝大乘論釋』卷八「於人所見有糞穢處，傍生見為淨妙飲食。於人所見不淨物中，餓鬼、畜生見為清淨。於人所見淨妙飲食，諸天見為臭穢不淨」（大正三一・四三三上）。

(221) 「波利餅」 未詳。

(222) 「是人中果報」〔參考〕（北魏）菩提流支譯『金剛仙論』卷八

「然就此所知法中，有種種差別，憂劣不同。如人中果報，比於諸天，優劣上下，不得為喻。況諸佛菩薩出世勝報，比於人天之果，俱然懸絕，不可算數」（大正二五・八五三中）。

(223) 「天上食」〔西晉〕法立・法炬共譯『大樓炭經』卷四「我天、上

壽盡，當復還生世間在人間，亦復身行善，口言善，心念善。終亡已後，當復還天上生天子。說是已，便念欲得食，即自然滿寶器食在前。福德少者，自然青飯食在前。福德中者，自然赤飯食在前。福德上者，自然白飯食在前。天人便取食之時，於口中自消盡，譬酥若麻油著火上即消滅。天人食時如是，於口中便自消滅。渴時即自然滿寶器。甘露漿在前。福德少者，自然青色漿在前。福德中者，自然赤色漿在前。福德上者，自然白色漿在前。便取飲之，於口中自消滅，譬如酥麻油著火上即消滅」（大正二・二九七中下）。

(224) 「不聽將去」〔上人〕を主語に補って譯した。會讀では別解

として「問うた人は」持ち歸るのを許さなかった」との案もあった。

(225) 「閑居」 閑居。『禮記』大學、傳六章「小人閑居為不善，無所不至」。

(226) 「迦毘羅所領」〔參考〕『高僧傳』卷三，曇摩蜜多傳「初密多之發願實也，有迦毘羅神王衛送，遂至龜茲，於中路欲反，乃現形告辭密多曰，『汝神力通變，自在遊處，將不相隨共往南方』。語畢，即收影不現。遂遠從至都，即於〔定林〕上寺圖像著壁，迄至于今，猶有聲影之驗」（大正五〇・三四三上）。〔南齊〕曇景譯『摩訶摩耶經』卷上「北方天王第一輔臣，迦毘羅夜叉，金髮大神，母指大神，散脂修摩羅神」（大正二二・一〇〇九中）。迦毘羅神王に關する近年の論考として大島（二〇一九）を參照した。

(227) 「有三十二童子，一名功德天，二者名善女天，是迦毘羅所領，恒來在左右，與我驅使」〔恒來在左右〕「善神敬護，常在左右」（比丘尼傳）淨秀尼傳。大正五〇・九四五上。『佛祖統紀』卷三六「敕尼淨秀所居為禪林院。秀有神異，感娑伽羅龍王兄弟來護。常有三十二童子，功德天，善女天，以任驅役（三十二童，應是三十二天）」（大正四九・三四六中）。

(228) 「得人餉飲食，令衆中行之」 食を布施する時には特定の人だけに特別接待（別請）せず，等しく全員を接待すべきであることを言うか？〔參考〕『梵網經』下卷，第二十七輕戒「若佛子，一切不得受別請利養入己。而此利養屬十方僧。而別受請，即取十方僧物入己。……」（大正二四・一〇〇七上）。

(229) 「聞人耳也」〔參考〕〔隋〕智顗『摩訶止觀』卷八下「若人坐時，或緣頭面，或緣人身體，墮而復上，翻覆不已。雖無苦痛，而屑屑難耐。或鑽人耳、眼、鼻，或抱持、擊擣，似如有物，捉

不可得，驅已復來，啾啾作聲聞人耳。此鬼面似琵琶，四目兩口
《云云》」（大正四六・一一五上）。

(230) 尾缺。

【文獻表】

- 大島 (二〇一九) 大島幸代「迦毘羅神考：靈泉寺大住聖窟における造像を
中心に」，肥田路美（編）『アジア佛教美術論集 東アジアⅡ 隋・
唐』，東京：中央公論美術出版，一三三～一六二頁。
- 竺沙 (二〇〇〇) 竺沙雅章「佛教傳來——大藏經編纂」，『大谷大學通信』五
〇・二二～三九頁（再録：大谷大學廣報委員會編『佛教傳來』，京
都：大谷大學，二〇〇一，二七一～二八八頁）。
- 船山 (二〇〇六) 船山徹『南齊・竟陵文宣王蕭子良撰『淨住子』の譯注作
成を中心とする中國六朝佛教史の基礎研究』，平成十五年度～平成十
七年度科學研究費補助金（基盤研究（C）（2）研究成果報告書，非
賣品）。

船山 (二〇一八) 船山徹「梁の寶唱『比丘尼傳』の定型表現：撰者問題解
決のために」，『東方學』一三五，三六～五三頁。

Li (2002) Li Rongxi [李榮喜], *Biographies of Buddhist Nuns: Translated from the Chinese of Baochang* (Taisho Volume 50, Number 2063). In *Lives of Great Monks and Nuns*, BDK English Tripitaka, Berkeley: Numata Center for Buddhist Translation and Research, pp. 67-154.

Tsai (1994) Tsai, Kathryn Ann, *Lives of the Nuns: Biographies of Chinese Buddhist Nuns from the Fourth to Six Centuries. A Translation of the Pi-ch'u-ni chuan, compiled by Shih Pao-ch'ang*, Honolulu: University of Hawaii Press.

陳慶元 (一九九五) 陳慶元『沈約集校箋』，杭州：浙江古籍出版社，一二七
～一二四頁「南齊禪林寺尼淨秀行狀」。

劉・陳・何 (二〇〇〇) 劉殿爵・陳方正・何志華（主編）『沈約集逐字索
引』，魏晉南北朝古籍逐字索引叢刊・集部第四種，香港：中文大學出
版社。

【參考 沈約「淨秀行狀」と寶唱「淨秀尼傳」の比較】

〔梁〕沈約「南齊禪林寺尼淨秀行狀」 （大正五二・二七〇中―二七二上）	〔梁〕寶唱「比丘尼傳」卷四，淨秀 尼傳（大正五〇・九四五上―下）
比丘尼釋淨秀，本姓梁氏，安定烏氏人也。 其先出自少昊，至伯益佐禹治水，賜姓嬴氏。周孝王時，封其十六世孫非子於秦。其曾孫秦仲爲宣王侯伯。平王東遷，封秦仲少子於梁，是爲梁伯。漢景帝世，梁林爲太原太守，徙居北地烏氏，遂爲郡人焉。自時厥後，昌阜于世，名德交暉，蟬冕疊映。漢元嘉元年，梁景爲尚書令，少習『韓詩』，爲世通儒。魏時梁爽，爲司徒左長史，祕書監，博極群書，善談玄理。晉太始中，梁闡爲涼、雍、二州刺史，卽尼之迺祖也。闡孫搗，晉范陽王虓驃騎參軍事，魚陽太守。遭永嘉蕩析，淪於僞趙，爲祕書監、征南長史。後得還晉，爲散騎侍郎。子嘯字道度，征虜司馬。子粲之仕宋，征虜府參軍事，封龍川縣都亭侯。 尼卽都亭侯之第四女也。挺慧悟於曠劫，體妙解於當年，而性調和綽，不與凡孩孺同數。弱齡便神情峻傲，	淨秀，本姓梁，安定烏氏人也。 祖嘯，征虜司馬。 父粲之，龍川縣都鄉侯。 淨秀幼而聰叡，好行慈仁。 七歲，自然持齋。家中請僧轉『涅槃經』，聞斷魚肉，卽便蔬食，不敢令二親知。若得鮭鱒，密自棄之。

非常童稚之伍，行仁尙道，洗志法門。 至年十歲，慈念彌篤，絕粉黛之容，棄錦綺之翫，誦經行道，長齋蔬食。 年十二，便求出家，家人苦相禁抑，皆莫之許。於是心祈冥感，專精一念，乃屢獲昭祥，亟降瑞相。第四叔超，獨爲先覺，開譬內外，故雅操獲遂。 上天性聰叡，幼而超群。年至七歲，自然持齋。家中請僧行道，聞讀『大涅槃經』，不聽食肉。於是卽長蔬不噉，二親覺知。若得魚肉，輒便棄去。 昔有外國普練道人，出於京師，往來梁舍，便就五戒，勤翹奉持，未嘗違犯。日夜恒以禮拜讀誦爲業，更無餘務。及手能書，常自寫經。所有財物，唯充功德之用，不營俗好。 少欲入道，父母爲障，遂推流歲月。至年二十九，方獲所志，落綵青園，服膺寺主。上事師虔孝，先意承旨，盡身竭力，猶懼弗及。躬修三業，夙夜匪懈。僧使衆役，每居其	從外國沙門普練諮受五戒，精勤奉持，不曾違犯。禮拜讀誦，晝夜不休。 年十二，便求出家，父母禁之。 及手能書，常自寫經。所有資財，唯充功德。不營俗好，不衣錦繡，不著粉黛。
--	--

如此推遷，至（二）十九，方得聽許，爲青園寺首尼弟子。事師竭誠，猶懼弗及。三業勤修，夙夜匪懈。僧使衆役，每居其首，跋涉勤劬，觸事關涉。善神敬護，常在左右。時有馬

首，精進劬勤，觸事關涉。有開士馬先生者，於青園見上，即便記云：「此尼當生兜率天也。」	先生，世呼神人也，見秀記言，「此尼當生兜率」。
又親於佛殿內坐禪，同集三人，忽聞空中有聲狀如牛吼。二尼驚怖，迷悶戰慄，上淡然自若，徐起下牀，歸房執燭，檢聲所在。旋至拘欄，二尼便聞殿上有人相語云，「各自避路。某甲師還」。後又於禪房中坐。伴類數人，一尼鼾眠。此尼於睡中見有一人頭屈于屋，語云，「勿驚某甲師也」。此尼於是不敢復坐。又以一時坐禪，同伴一尼有小緣事，暫欲下牀，見有一人抵掌止之曰，「莫撓某甲師」。於是閉氣徐出，歎未曾有。如此之事比類甚繁，既不即記，悉多漏忘，不得具載。	嘗三人同於佛殿內坐，忽聞空中聲狀如牛吼。二人驚怖，唯秀淡然，還房取燭，始登塔，復聞空中語曰，「諸尼避路。秀禪師歸。」他日又與數人於禪房中坐。一尼鼾眠，睡中見有一人頭柱殿，語曰，「勿驚秀尼」。後時，與諸尼同坐，一尼暫起，還見一人抵掌止之曰，「莫撓秀尼」。
性受戒律，進止俯仰，必欲遵承。於是現請曜律師講，內自思惟，但有直一千。心中憂慮事不辦。夜即夢見鴉、鵲、鸛、雀子各乘車，車並安軒，車之大小還稱可鳥形，同聲唱言，「我助某甲尼講去」。既寤歡喜，設供，果食皆精。	進止俯仰，必遵律範。欲請曜法師講「十誦律」，但有錢一千，憂事不辦。夜夢見鴉、鵲、鸛、雀子各乘車，大小稱形，同聲唱言，「我當助秀尼講」。及至經營，有七十檀越爭設妙供。
後又請穎律師開律。即發講日，清	後又請法穎律師重講「十誦」。開

淨盥水自然香如水園香氣，深以為欣。既而坐禪得定，至於中夜方起，更無餘伴，便自念言，「將不犯獨」，即諮律師。律師答云「無所犯也」，意中猶豫恐違失。	題之日，澡罐中水自然香馥。其日就坐，更無餘伴，起懼犯獨，以諮律師。律師答言「不犯」。
且見諸寺尼僧，多不如法，乃喟然歎曰，「嗚呼，鴻徽未遠，靈緒稍隳。自非引咎責躬，豈能導物」。即自懺悔，行摩那埵。於是京師二部莫不咨嗟云，「如斯之人，律行明白，規矩應法，尙爾思愆，何況我等動靜多過而不慚愧者哉」。遂相率普懺，無有孑遺。	秀觀諸尼未盡如法，乃歎曰，「洪徽未遠，靈緒稍隳。自非正己，焉能導物」。即行摩那埵，以自悔首。合衆見之，悉共相率，退思補過，慚愧懺謝。
又於南園就穎律師受戒。即受戒日，淨盥水香還復如前。青園諸尼及以餘寺，無不更受戒者。律師於是亦次第詣寺，敷弘戒品，闡揚大教。故憲軌退流，迄屆于今。穎律師又令上約語諸寺尼，有高牀俗服者，一切改易。上奉旨制勒，無不祇承。律藏之興，自茲更始。後又就三藏法師受戒，清淨水香復如前不異。	宋元嘉七年，外國沙門求那跋摩至都，律範清高，秀更從受戒。
青園徒衆既廣，所見不同。師已遷背，更無覲侍。於是思別立住處，可得外嚴聖則，內窮宴默者。	而青園徒衆悟解不同，思立別住。外嚴法禁，內安禪默，庶微稱己心。宋南昌公主及黃修儀，以大明七年八月，共施宜知地以立精舍。

昌公主深崇三寶，敬仰德行，初置精舍。	上麻衣弗溫，藿食忘飢，躬執泥瓦，盡勤夙夜。以宋泰始三年，明帝賜號曰禪林。蓋性好閑靜，冥感有徵矣。而制龕造像，無不必備。又寫集衆經，皆令具足，粧演染成，悉自然有。娑伽羅龍王兄弟二人現迹，彌日不滅。知識往來，竝親瞻觀。招納同住十有餘人，訓化獎率，皆令禪誦。每至奉請聖僧，果食之上，必有異迹。
又於一時，虔請聖衆七日供養。禮懺始訖，攝心運想，即見兩外國道人，舉手共語，一云呾羅，一言毘呾羅，所著袈裟色如桑葢之熟。因即取泥，以壞衣色，如所見。於是遠近尼僧，竝相倣效，改服閒色。故得絕於五大之過，道俗有分者也。	秀麻衣藿食，躬執泥瓦，夙夜盡勤。製龕造像，無所不備。同住十餘人皆以禪定爲業。泰始三年，明帝敕以寺從其所集，宜名禪林。秀手寫衆經，別立經臺，置在于堂內。娑伽羅龍王二兄弟現迹彌日，示其擁護。知識往來，無不見者。每奉請聖僧，果食之上，必有異迹。
此後又請阿耨達池五百羅漢，日日凡聖無遮大會。已近二旬，供設既豐。復更請闍闍五百羅漢，足上爲千。及請凡僧，還如前法。始過一日，見有一外國道人，衆僧悉皆不識。於是試相借問，自云，「從闍闍國來」。又問「來此幾時」，答云「來見。	又嘗七日供養。禮懺始訖，攝心運想，即見二胡僧舉手共語，一稱彌呾羅，一稱毘呾羅，所著袈裟色如熟桑葢。秀即以泥染衣色，令如所見。
他日又請阿耨達池五百羅漢。復請闍闍五百羅漢。又請京邑大德二旬大會。第二日又見一胡僧。合衆疑一之，因即借問，云「從闍闍來，至已一年」。使守門者密加覘視，多人共見從宋林門出，始行十餘步，奄忽不	見。

始一年也」。衆僧覺異，令人守門觀其動靜。而食畢，乃於宋林門出，使人逐視，見從宋林門去，行十餘步，奄便失之。	又嘗請聖僧浴，器盛香湯及以雜物。因而禮拜，內外寂默。即聞器檣杓作聲，如用水法。意謂或是有人出。便共往看，但見水杓，自然搖動。故知神異。
又曾夜中，忽見滿屋光明。正言「已曉」，自起開戶，見外猶闇，即便閉戶還牀，復寢久久，方乃明也。	又曾浴聖僧，內外寂靜。唯有檣杓之聲。其諸瑞異，皆類此也。
又經違和綿篤。忽自見大光明，遍於世界，山河樹木，浩然無礙。欣爾獨笑，傍人怪問。具陳所見，即能起行，禮拜讀誦，如常無異。	又復違和，數日中亦殊綿惱，恒多東向視，合掌向空。於一時中急索香火，移時合掌。即自說云，「見彌勒佛及與舍利弗目連等諸聖人」。亦自

見諸弟子數甚無量滿虛空中，須臾見彌勒下生翅頭末城。云：「有人持幡華伎樂及三臺來迎。於此上幡華伎樂，非世間比。半天而住，一臺已在半路，一臺未至半路，一臺未見，但聞有而已。爾時已作兩臺。為此兆故即更作一臺也。」又云：「有兩樹寶華在邊，人來近牀，語『莫壞我華』。自此之後，病即除損。 前後遇疾，恒有瑞相。或得涼風，或得妙藥，或聞異香，病便即愈。疾差之爲，理都以漸，豁然而去。如此甚數，不能備記。	齊文惠帝、竟陵文宣王厚相禮待，<u>供施無廢</u>。 年耆力弱，不復能行。
又天監三年，一夏違和。於晝日眠中見虛空藏菩薩。即自圍遶誦唄，唄聲徹外。眠覺所患即除。又白日臥，開眼見佛入房，幡蓋滿屋。語傍人令燒香，了自不見。	梁天監三年，敕見聽乘輿至內殿。
上天監五年六月十七日得病，苦心悶，不下飲。彭城寺令法師，以六月十九日夜，得夢見一處，謂是兜率天上。住止嚴麗，非世間比。言「此是上住處」。即見上在中。於是法師有語上，「上得生好處，當見將接。上是法師小品檀越。勿見遺棄」。上即答云，「法師丈夫，又弘通經教，	五年六月十七日，苦心悶，不復飲食。 彭城寺慧令法師，六月十九日，夢見一柱殿，嚴麗非常，謂是兜率天宮，見淨秀在其中，令即囑之，「得生好處，勿忘將接」。秀曰，「法師，兄是大丈夫，弘通經教，自應居勝地」。令問秀病往看之，述夢中事。

自應居勝地。某甲是女人，何能益。法師又云，「不如此也。雖爲丈夫，不能精進，持戒不及」。 上時體已轉惡，與令法師素疏，不堪相見。病既稍增，飲粥日少，爲治無益，漸就綿微。	至七月十三日，自夢見幡蓋、樂器在佛殿西。
至七月十二日，爾時天雨涼，悶勢如小退。自云，「夢見迎來，至佛殿西頭人人捉幡竿，猶車在地。幡之爲理，不異世間軍隊擔鼓、旗幡也」。	至七月十三日，自夢見幡蓋、樂器在佛殿西。
至二十日便絕，不復進飲粥。	二十二日，請相識僧會別。
至二十二日，令請相識衆僧設會，意似分別。	至二十二日，請相識僧會別。
至二十五日，云「見十方諸佛遍滿空中」。	至二十五日，云「見十方諸佛遍滿空中」。
至二十七日中後，泯然而臥，作兩炊久，方復動轉。自云，「上兜率天，見彌勒及諸菩薩，皆黃金色」。上手	二十七日，告諸弟子，「我升兜率天」。言絕而卒。年八十九。
中自有一琉璃清淨響，可高三尺許，以上彌勒，即放光明，照于上身，至兜率天，亦不見飲食。自然飽滿，故不復須人間食也。但聞人間食皆臭，是以不肯食。於彼天上，得波利餅，將還，意欲與令法師。有人問，「何意將餅去」。答云，「欲與令法師」。是人言，「令法師是人中果報，那得	至二十七日，告諸弟子，「我升兜率天」。言絕而卒。年八十九。

食天上食」，不聽將去。既而欲見，令法師閑居，上爲迎法師來相見，語法師，「可作好菜食，以餉山中坐禪道人。若修三業，方得生兜率天耳」。法師不坐禪，所以令作食餉山上道人者，欲使與坐禪人作因緣也。
自入八月，體中亦轉惡，不復說餘

事，但云，「有三十二童子，一名功德天，二者名善女天，是迦毘羅所領，恒來在左右，與我驅使。或言得人餉飲食，令衆中行之」。復云，「空中晝夜作伎樂，聞人耳也」。(——下缺——)

〔注記〕

右掲『比丘尼傳』淨秀尼傳中の二重線は、沈約「淨秀行狀」と直接には對應しない。恐らく何か別の文獻に基づく記述であろうと推測される。
『比丘尼傳』淨秀尼傳には二種の英譯が出版されている。Tsaï (1994: 87-91) 及び Li (2002: 135-139) を参照されたい。
『比丘尼傳』の撰者について傳統的に梁の寶唱とするが、それを疑念を抱く研究もある。しかし精査の結果、寶唱撰を疑う必要が全くないと言えることについては船山 (二〇一八) を参照されたい。